

國體乃格化

田中智學 虔述
師子王文庫

發行

~~274~~
~~336~~



始



特100
234

國體の權化序

此篇は去る大正元年十月二十七日下野國栃木町に於て同所なる本化行學會の主催にかゝる國民教育佛教實義講演會にて爲せる、晝夜二回分の予が講演筆記なり、前さ本化行學會の希望により國柱新聞紙上に掲載して、廣く世に頒ちたるも、時日の切迫と偶々予の關西旅行中なりしとを以て、未校閲のままに便載せり、然るに其後この筆記によりて甚大の教益を受けたりとの報、各地より續

序

續として來り、吾が編輯局及び本化行學會に對して感謝するもの多々なりき、爰に吾大阪の同志は、此篇の法益多きを欽し、更らに別刊に付して一層弘布せんことを懇請して已まず、予今また痾を養て旅寓に在りといへども、深信の誠意これを厝くに忍びず、乃ち多少の修訂を加へ、且つ小題若干を挿置し、冠注を添えて再刊に付す、要は読み易く會し易からしめんためにとてなり。

夫れ日本國體の自覺は、今の吾國に於ける最緊要事たり、國體の全發揚として、天は明治天皇を降したり、明治

維新の大業は、西洋の文華と日進の氣運とを助縁として開き出てたる國體の花なり、助縁は自ら助縁にして、花は自ら花なり。春風よく爛熳の花を促せども、風は花にあらざるが如し。

國民の上には、久しく國體を忘却して自己の天職を諳る、卑きを甘なひ紊れに馴れて、滔々として還り澄むことを知らず、危いかな國それ岌々乎たり。

日本國體の闡明せられざるは、獨り吾國の不幸のみにあらず、亦將さに世界人類の損失たらんとす、今に於て國

體觀念の充實を叫ぶは、むしろ天然の要求のみ、國體の
 全容たりし 明治天皇は、亦直ちに國體教訓の木鐸たる
 ことと言ふまでもあらじ、即ち國體の權化として之を觀察
 し奉るは、所謂人を以て法を證するの一格なり、冀くは
 之を讀まんもの、豁然として醒起する所あらんことを、
 再刊に臨みて爲に一言を叙すといふ。

大正二年七月上旬

田中智學 虔記

國體の權化

田中智學 謹演

一 世界中の驚歎推稱

此頃 明治天皇の御崩御に依ていやましに御盛徳が世
 に知れ渡りまして、日本國民はいふに及ばず、海外各國
 の人々に至るまで、筆を揃へて 明治天皇の御徳を賞讚
 致します、或はペートル大帝以上なりといひ、或は獨逸
 先老帝の上に出る名君なりといひ、或はナポレオンやワ

ペートル那翁等は雄
 大なる凡夫王のみ
 世界古今の尤も大に
 して神聖なる英主を

國體の權化

求めば、獨り明治大帝ましますのみ。

●●●●●
明眼詩人

獨逸の大儒スタインも亦曾て日本帝國を以て全世界の締盟を主なる由を語りて、大王なる由を語りて、海江田子を一驚せしめたる趣、高崎男の直話なり、而して、スラインは日本史を、是迄來遊の日本紳士あること、執れども尋ね

シントン以上の大成功家であると云ふ如き、種々なることをば外國の諸新聞にも書立てた、既に先達ても某新聞に見えて居ったが、ポーランドの一詩人は、明治天皇を以て世界の帝王中の帝王なりと云ふことを書て、世界中のあらゆる帝王や大統領に其詩を送つて、世界中の帝王は、明治天皇の家來となるべきものなりと云ふことをば鼓吹した爲に、米國政府などは之に密偵を付けて非常に怖れて居ると云ふやうなことが紙上に見えました、さう云ふやうな工合に内外各國の人は、明治天皇を以て未だ曾て人間の世の中に現れたことのない大聖人である、大

かしながら吾國の歴史は語らざるべきほどの歴史なりとて、一人も語らざるは、故に日本といふ國は、一考へ居たり、然るに今始めて此堂輝ある世界無類の光輝ある歴史を聞て、甚だ驚嘆せり、何故に日本に本人は自國の歴史を他に語ることを耻づるにや、いかにも不思議の千萬元に語り、しといふ。げに不思議の人たちなり、所謂「吾々劣等人類」などいふ徒輩ならん、かゝる徒輩に外國の學問をさせれば、この

偉人であると云ふことをば申出しました、是は實際其通りに違ひないのであります、併ながら此標準と云ふことに就きましては、大抵は『此四五十年間の短かい間に、西洋各國が數百年間掛つて仕上げた文明をば僅かな年限に美事に仕上げたからえらい』：斯う云ふことで、先帝の御盛徳を讃嘆して居ると云ふに過ぎないのであります、そこで先づ西洋各國が數百年掛つて築き上げた文明をば四十五年の間に仕上げた、而も各國の帝王として先帝ほど御艱難をなされた方はない、又先帝ほど御苦勞をなされた方もない代りに、先帝ほど御艱難御苦勞

そ、國性も頽れ來れるなりけり。

に打勝つて成功なされた方も何所の國にもない。

二 驚くべき事實

予が明治二十七年の奏疏

此に於て貴方々も爾だらうと私は推測するが、斯く申す自分なども明治天皇を以て第二の神武天皇であると云ふことは、既に明治二十七年に『佛敎夫婦論』を兩陛下に献上した時に其奏疏に書いたことである、當時世人は之を諂言だぐらゐにいつたが、私は一の確信主張があつて、第二の神武天皇であると深く信じて書いたのであるけれども、其當時の人は之を以て一種の先づ頌徳に過ぎない即ちお世辭に過ぎないと斯う云ふ風に、現

民間に傳はらざりし御聖徳が崩御によりて一時に知れ渡るに

に私を知た者や友人などでもいふて居つた、所が此頃は殆ど全國舉つて明治天皇を以て神武天皇の御生れ變りであるとか、第二の神武天皇であるとか、或は神武天皇以上の御方であるなどと言ふやうになつた、それは全く國民の眼が開いて來たのです、併ながら明治二十七年に於て『第二の神武天皇である』と云ふことを公然と明言した拙者ですらも、崩御に依て色々な事實が吾吾の面前に現はれて、其一事一物零細なる報告を集めて見て、是程までに御仁慈、御威徳が、圓滿に在らせられた御方であるかと云ふことを、初めて知つたことが幾

及○び○ぬ○、あ○は○れ○御○生○
前○に○其○幾○分○を○も○知○ら○
せ○得○た○ら○ん○に○は○と○残○
念○に○お○も○ふ○事○一○二○に○
し○て○足○ら○ず○。

△月△光△を△隠△す△もの△
△は△雲△也△吁△此△癡△雲△

らもある、勿體ないことであるけれども、吾々はさうま
ては考へて居らなかつたことがあつた、それは政府の役
人でも宮内省の人々でも、どう云ふ譯か此御盛徳のこと
を吾々臣民に傳へて呉れない、唯『九重の上は雲深うし
て知ることが出来ない』とか、萬事『畏れ多い』とか云
つて 天子様のことは民間に知らせないやうにする、餘
りに知らせないやうにすると、人間と云ふものは妙なも
ので、此所に疑ひを起す、であるから甚しきに至つては
あられない想像などを描かぬとも限らぬやうなことが
あつて、吾々は大に遺憾なりとして居つた、併し色々な

方法に依て、吾々は 先帝の御盛徳の優れさせ給ふたこ
とを承知して居つたが、この頃方々から傳はつて來た事
實を集めて見て驚いて居る程の件は、是までとんと知ら
なかつた、マア『天子様が人民をお愛しになる』、『仁心
が深く在ます』と云ふやうなことは、如何なる場合でも
君主の徳を褒める時は、約ね常套語の如くなつて居る、
『上の思召』など云ふ事も、矢張り其轍か知らんと云ふ考
も無いではなかつた、所が其事が事實として現れて來た
真相を見ると、實に想像より以上であつた。
たとへば其一例を挙げると、しつかりした醫者から聞

身[□]の[□]痛[□]苦[□]を[□]言[□]は[□]
 ず[□]、[□]民[□]の[□]爲[□]に[□]米[□]
 價[□]を[□]問[□]ふ[□]、[□]此[□]仁[□]
 此[□]明[□]、[□]よ[□]く[□]日[□]本[□]
 中[□]興[□]の[□]大[□]業[□]を[□]爲[□]
 した[□]ま[□]へ[□]り

く所に依ると、先帝様の御病氣であらせられた尿毒症
 と云ふものは非常に苦痛な病氣であるさうです、然るに
 御發病以來一旦人事不省に御陥りになつてから、餘り何
 も仰せられなかつたさうである、併ながら少々御輕快に
 なつた際に侍臣が何か御伺ひをすると、唯一言、侍臣に
 對して「米はどうなつた」と御尋ねになつたゞけ、其前
 後に於て何等お言葉がなかつた、聊かも御自分の御病氣
 に就て苦しいと云ふことを仰せられなかつたといふ、元
 來陛下が非常な忍耐力の御方で在らせられると云ふ
 ことは、御平生に於ても伺つて居つたが、御大患中偶々

牛喘を聞て自ら戒る
 の名宰相なく、迅雷
 風烈に起つ賢良もな
 し、個人主義の頭腦
 豈に民の爲に米價を
 問ふの雅量あらんや

口のきけたと云ふ場合に「米はどうなつた」と云ふこと
 を仰せられたのは、何故かと云ふと、其前から米價騰貴
 に由て、細民が難澁して、殆ど東京市中の如きは社會的
 問題にもなつて居りました、其時に當局の大臣よりも、
 東京府の知事よりも、東京市長よりも、警視總監よりも
 農商務大臣よりも、何よりも一番先帝様が此米の事件
 に就て、宸襟を悩ませ給ひて、此事に就て研究をして
 居らした、何事か研究の結果、仰出されることでもあ
 らうと云ふ所であつたかも知れない、其中にあの如な御
 病氣にお成りになつた、一旦御自覺が戻つて御意識が鮮

唯欽仰せよ

明に成らせられた、この雲間から洩れた月の間に仰せられた一言は、御自分のことでもなければ、畏れながら皇太后陛下の事でもなく、皇太子殿下の事でもない、唯「米はどうなつた」と御聞きになつたと云ふだけの御一言である、是は今私が諸君にお話するやうな鹽梅に、私に傳へて呉れた新聞紙は、さう云ふ意味で書いたのではない、御盛徳の一斑として月並的に書いたのでありましようが、私は之を見て驚いた、さうあらうとも思つたけれども是程までとは思はぬ、それで其當時私は甚だ拙劣ではあるけれども、自分の所思を叙べる爲に

あな尊と病のうちも民の爲め

米の價を問ひませしとや

と云ふ腰折を詠んでお手向け申した、どうです、凡そ君上としては人民を憐れむと云ふことは、自分の家來、自分の子供であるから、可愛がると云ふことは當り前だ、當り前だけれども、何と御自分の病痛を御忘れになつても、唯忘れなかつたのは細民が米の高いので困つて居ると云ふことに就て、深く宸襟を惱ませ給ひたる所の御一念が遺つて居て、御發病以來御崩御になる迄も、他のことは仰せられないで、唯此一言を遺して御崩御なつた、

あゝ大臣顯官の相場
で儲けたるものなき
や。巨商豪族の米を
買占めて利を計りた
るものなきや。あゝ
大官、あゝ豪族。

是れ形式的でない、尤も深い御仁心の表示である。

三 天地同體の御性格

もう一つの事實は、陛下は大層行儀のいゝ方だと云ふことは承はつて居た、是は一體日本の皇室の特徴らしい、私曾て村雲の宮様に應接したことがあつたが、現に私が曾て京都の本國寺で演説をした時に聴きにお出でになつた、前後四時間の演説を膝も崩さず端然と聴てお居てになつた、前に坐つて居つた京都府の高等官達も非常に困つて居つた様子であつた、御所へ行つても數回お目に懸かつて、色々な長い談話をして、私は其間に度々體

長時間の端坐謹聽

眞に王者の儀表を全ふせる君子國の帝王

憲法の會議

をもちくして膝を曲げたり色々なことをしたが、村雲様は端然と坐つてお笑ひにもなるけれども、體は少しも動かされぬ、それを或人に話したら、それは村雲さんばかりぢやない、總じて皇族はみんな爾うだと云ふことを聞いた、其つかさとも謂ふお方だから行儀のいゝお方であること云ふことは承りもして居つたし、想像もして居つたが、金子堅太郎君の談話だか何だかに書たのを、諸君も御覽になつたかも知れぬが、憲法の會議をする時に、一年有餘に亘つて毎日の様に會議をする、他の人は頭が痛いとか或はどう云ふ事件があるとか云つて休んだこと

公を重んじ私を輕ん
じたまふの聖意は、
直に是れ國を重んじ
民を重んじたまふ也

●一日も休息した
●まはざる御精勵

もあつたが、先帝陛下ばかりは一日も御休みになつた
とはない、一度會議中に内親王の御病氣が非常に重ら
せられて、御危篤であると云ふ報が來たので、伊藤公爵
は、會議を見合せませうかと申上げた所が『苦しうない』
と仰せられて、其會議を續けて早終ひにして御退けにな
つたさうり、一日も御休みにならぬ、さうして熱心に憲法
制定に就て、諸の當局者達の議論を御聽取になつて御裁
斷なすつた、その年月は一年半に亘つた、それだけは未
だ宜い、一國の大事を議する時で、憲法が一つ間違つた
ら先帝陛下が上 祖宗に對し下萬代の蒼生に對しての

更に驚くべき事
實！眞に驚歎
すべき事實也

御責任もある、容易ならぬ事であるから御勉勵なされた
と云ふことはそれ程驚かない、然るに一日もお休みにな
らぬのみならず、陛下に差上げてある御椅子は肱突の
附いたお椅子である、皇族方の椅子は皆さうさまつて
居る、私共にも皇族方がお出でになることもあるの
で、普通のでは行かぬと云ふものだから其式に據つて當
局者に問合はして拵へたが、脇に肱突がある、私も腰を
かけて見たいけれども腰をかける譯に行かない、フワリ
とした誠に好ささうな椅子だ、それが差上げてある、天
子様だから其位のもは當り前だ、然るに一年有餘に亘

光明昭耀せる神格

偉大なる儀表偉大なる理由

たから、こちらもやるまいと思ふけれどもさうは行かない、此に於て私は成程どうも明治天皇の御盛徳と云ふものが海の内外に溢れて、さうして上 天照太神以來 神武天皇以來、 皇祖皇宗の大統を享けさせ給ひ、遺憾なく滿天下に其光輝を揚げさせられ、億兆萬世をば斯くの通りに立派な開明に誘ひ導いて、我等に光と力を御與へになつた此御威徳は決して偶然ではない、たゞ事ではない、何か此所には一つの偉大なる理由が無ければならぬと云ふことを、私は考出したのであります。 陛下の御文藻である、

絶代の文藻

絶代の精勵

る、此頃は何かへボ小説の一つも拵へて青年雜誌にでも出すと忽ちに文士氣取、何か妙な文士の會でも出來てすぐ文士がると云ふ様な者が幾らもある、都大路は偕措て随分鳥も通はぬ僻陬の地に至つてもさう云ふ輩が續出して、世の心ある者をして眉を顰めしめて居る、然るに萬機の政に當つて日々の御精勵、日曜日にもお休みにならない、夜も十一時頃まで用を爲され、暑いからと云つて湯治に行かれるではなし、寒いからと云つて暖かい所へ行かれるではなし、方々に離宮もあらツしやる、御用邸もあらツしやるにも拘らず、更らにお出掛にならない、

何も儉約でお出でにならぬてはない、忙がしくて行けぬ
 さう忙がしいのは何の爲であるかと言へば、則ち此國を
 治める爲に忙がしい、所謂人民の爲に忙がしい、それ程
 忙がしければ、吾々なら斯う忙がしくては何も出来ぬと
 云つて五色の息を吐て大騒ぎ、戦争の濟んだ當時などは
 随分澤山の勳章を渡さなければならぬので、之を一々御
 直署になつては大變だから、適當の方法を以て印刷でも
 致して御璽だけ捺したら如何と申上げた所が、いやさう
 でない、是等の人の戦つた事を思へば朕が名を書く位の
 事は何でもないと仰つて一々御自分でお書になる、其位

萬物の風詠に托して無盡の道義を垂示したまふ何等の風流。何等の妙想

だから随分お忙がしい、其忙がしい中で日々上は道のことより、神のことから、思想上のこと、下は風物人事百般のこと、凡そ眼に見、耳に聞く所の事柄は、皆三十一文字の歌として、日に何十首となくお作りになつて、九萬幾首殆ど十萬の數があると申す、どうです、日に十づつ詠んでも年に三千六百しか詠めない、十年に三萬六千吾々が腰折の一つか二つ詠むにも、三日か四日考へて非常に頭が痛む、それが此繁劇の間に在つてお詠みになる此御製ばかりでも錦を綴り珠をつらねたる立派な御文藻、而も之を人にお示しにならない、さう云ふ御立派な

歌にあらすして直に是れ道なり

金玉の詞章十萬の多作すてに古今萬邦に卓絶す

恐れながら詞藻の高妙に於ても古今類少しと拜し奉る二夢の紅葉一赤壁賦の句題などの聖作、只々萬

御文藻があつても決して歌よみだと云ふやうなことはお思ひにならない、歌といふ觀念もお持ちにならない、唯「道」と云ふ觀念より外にお持ちにならない、道の言葉であつて風月の言葉でないといふことを仰せられた、御製がある、是だけでも驚くべきである、大體十萬の歌があると云ふだけでも大したもの、それだけでも人間一生のあらゆる智の精力を絞つてもむづかしい、昔から山邊赤人とか人麿とか貫之とか偉い人が幾らもあるが、金聲玉音とも謂ふべきものが十萬からあるといふ事は耳ない、それだけでも世界一だ、それを唱氣にもお出しにならぬと云

古の絶唱と欽仰し奉るのみ

世に二つの問題あり

「聞道勉學竭畢生力」一語簡に

ふに至つては益々驚いたものではないか、其他陛下の御盛徳はどちらからどう云ふ風に賞讃し奉るも、人間の言葉や文字では現はすことが出来ない、是れ抑々何であるかと云ふと、是が問題である。

是は修養の結果であると云ふのと、天稟の然らしむる所であるといふのと、先づ此二の問題がある、尤も御修養の厚いお方であると云ふことは、世間に既に御崩御に依て發表せられました副島伯への御宸翰に依ても知れる、「朕道を聞き學を勉む豈一二年に止まらんや將に畢生の力を竭さんとす」と云ふことを仰せられた、副島伯が

□して□切、□王者の□
□度□昭□々□乎□たり。

病氣又は事故に依て、あらうが骸骨を乞ふて御役御免を願つた時にお止めになる時の御宸翰、身を山林に退くごとき事は朕斷じて許さぬと仰せられて、副島伯を師と仰いで道を聞かると仰せられた、朕道を聞き學を勉むるは豈一二年にして止まらんや將に畢生の力を竭さんとす：。どうです、少しばかり何か學校でも卒業して文學士だとか何學士だとかになると、忽ち本を讀むことも思想を練ることも放抛らかして、僅の月給に嚙り附て、結局何れかの淑女と縁組てもしやうと云ふので求婚の廣告でも出す、斯う云つたやうな人間が多い、昔の書生と云ふも

△天下國家一變して羊羹
△小説となり、羊羹
△小説一變して女と金
△世の中となる。

のは五能も叶はぬ癖に直き『天下國家』と云ふことをいッたものだが、此頃の書生に『天下國家』などと云ふ者も無い、マア良い茶でもいれて羊羹でも食はうとか、薩摩芋でも食はうとか、然らずんば女の跡を追駈けることのみを考へて居る、羊羹や薩摩芋や女や小説にのみ親んで偶に天下國家などと言ふものがあると、それを氣違のやうに思つて居る、それでも羊羹や女の中はまた宜いが終ひには泥棒をする、此間やうく警視廳も眼が覺めてジゴマの活動を止めたが、私は初めて見た時さう思つた怪しからぬことをやる、それでなくてさへ盗人根性のあ

●●●●
盜化の世

▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
修養は方便なり

る者を煽動して、『泥棒になれ泥棒になれ』と云ツて教るんだから堪らない、そんな今の世の中である、所が陛下は『朕道を聞き學を勉むること豈一二年にして止まらんや將に畢生の力を竭さんとす』と仰せられた、是が御齡三十前後の時の御宸翰、其位であるから非常に修養の深い御方であると言ふことはもう明かだ、あの位の大重病であるに拘らず、痛いとか辛いとか云ふことを一言も仰せられないと云ふことは、克己心の強い御方と云ふことも分ツて居る、それでは副島伯に聞たり元田永孚に聞たり猪熊夏樹に聞たり穗積八束に聞たりして、修養を積

▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
天稟は素質なり

◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎
修養以上天稟以上の大人格

んでえらくお成りになつたのであらうか、それとも何か別に書物でも讀んで御工風なされたのであらうか、或はさうでない、お生れ付きで天稟で在しやツた、即ち天の成せる聖人であると云ふのであらうか、先づどツちか此二つの内に持つて行かなければさしづめ勘定が合はぬ。御生れ付きの大聖人で在たものであらうか、或は非常に御勉強なされて、『克く念ふて聖となる』とあるから、勉強をなされた結果あの位な大圓滿なる盛徳を獲得なされたのであらうか、但しは外に大理由があるか、此解決を與へることが今日に於て 明治天皇に對する御報恩、

記○せ○よ○世○の○學○問○
の○何○も○の○も○明○治○
大○帝○の○大○人○格○を○
作○り○得○る○も○の○あ○
る○こ○と○な○し○

來た修養の結果ではない、西洋の學問でも印度の學問でも、今ある所の佛教の如きでも、決して明治天皇の如き偉大なる人格をば作り得る力がない、であるから修養の結果此大聖人となつたのではない、然らば明治天皇は御生れ付きの聖人かと云ふと天性も勿論えらいお方に違ひない、天性がえらい、御血統は申分がない、お父様が孝明天皇であらせられ、ずつと遡つて行けば其御血統の中には聖徳太子のやうな聖人もあれば神武天皇の如き聖人もある、其以前は神様だ、神様の御末だから其遺傳があるに相違ない、普通の者でないことは分つて

形○の○端○正○は○、○心○の○正○
去○遠○々○劫○來○の○積○習○也○

●●●●●
自○墮○落○と○横○着

汽○車○の○こ○ん○で○居○る○時○
に○も○長○々○と○お○の○れ○獨○
り○ね○そ○べ○り○て○他○人○の○
迷○惑○を○構○は○ぬ○や○つ○

居る、今の行儀のいゝなどと云ふことも矢張神様の御遺傳であらう、尤も吾々だつて神様の子孫には違ひないけれども、途中から色々なものが這入たものと見えて胡座をかいたり何かするやうになつた、吾々は白狀するけれども全く自墮落だ、汽車に乗つても直き毛布などを敷いてごろりと横になる、あれは腰を掛けるやうに出來て居るのにそれへ横になる、寐たければ寐臺を買へば宜い、ごろりと横になつて寐る、所が新人が來て鞆などを持て困て居ても、吾々は徳義心に責められるから不承々々な面をして起きるけれども、中には起きないて人が這入

（然りやつなり）三
等に少くても一二等に
多し中にも二等客に
は此種の成金者流多
し、つらや是れ亡國
の縮圖なり。

●●●
示同凡夫

ツて來ると餘計ずツと伸ばす奴がある、是はみんなさう
云ふ悪い習慣が附いたので、根本は人が來て困るから起
きてやらうかしらと思ふのが當り前だのに、圖々しく其
本性の方を伏せて習慣の方を表へ出して置く、然るに
先帝陛下の如き行儀の好い方は神様の御末であるからと
云ふことは明かであるが、單にその天稟の御性來ばかり
ではない、それよりもずツと大きい堂々とした理由があ
る。

●●●
兎に角天稟の御盛徳はあらツしやるに違ひない、けれ
ども凡體を以てお生れになつた、血統は神様の血統だツ

始めより普通人に異
りてありといはゞ、
是れ人間の根本に
らず、人間の手に
の、人に於ては、
何等かの學問とか、
教訓とか、自覺とか
によりて、卓れたも
の、圓滿なるものと
なれりといふことに
於て、吾等の則るべ
き眞價を認むるな

て、凡體を以てお生れになつたのだから切れば血が出る
時候の變化に依ては御病氣にもおかゝりになる、矢張り
吾々と同じ體は凡體だ、其凡體までも、唯神様だといふ
事はない、承はれば御幼少の時には随分 先帝様も我儘
で居らしつた、人の頭をぽか／＼お擲りになつた、吾々
と同じことだ、御青年の折には随分御立腹もなすツて侍
臣共が困ツて、皇后陛下から申上げてやツとお解けに
なつたなど云ふこともあると申すことだ、それでこそ
有難い、それでこそ貴い、先帝陛下がおぎやあとお生
れになつてから三墳五典の學問に通じて各國の事情はそ

し、其正義の大
本至源に於て
は、世界唯吾日
本あるのみ、其
の彰るゝや只時
あり、明治大
帝獨り之を能く
したまふ所以也

誰でも分る、考へれば分つて來る、能く深く思ひを致さぬから分らぬ、能く思ひを致せば此二つは如何にも鮮明だから分る、もう一つちよつと分らぬのは何だと云ふと其人間の道と云ふものゝ元がある、政治の道と云ふもの元がある、此人道の正義に政道の正義と云ふものゝ、もう一つの元をば確立なされたと云ふことは、死と釋迦基督等の大聖人と匹敵して世界に指を折るべき所の偉大なる聖人である、それは何である、所謂第一は「勅教」の御宣示、第二は「日本憲法」、扱第三は……則ち「國體の御自覺體現」である。

大斷案

六 國體に對する深き御自覺

そこで私が兩方をば解決するのに 明治天皇の御盛徳は御修養から得たのでもなければ御天性から得たのでもない、御修養も御天性も幾らかは手傳つて居るけれども其骨と云ふものはさう云ふ譯でない、

即ち 明治天皇は深く國體と云ふことを御自覺になつた、日本の國體と云ふことを深く御自覺になつて、我は此國體の把持者である、國體の綱を持つ役である、その保護者である、であるから己れが一つ間違つたら大變である、己れが一つ遺損つたらは此六千萬の同胞

を窮地に陥れるはまだしも、世界の何物にも換られな
い我 御先祖代代の、 皇祖皇宗の大統をば地に落し
て仕舞ふ、

神武天皇から數へて、人間になつてからでさへ二千五百
年、此二千五百年掛つて積來つたる人間世界の大沽券、
遠く其淵源を探ねれば 天照皇太神より嫡々相傳、世界
人類に向つて正義正道の大權を握つた所謂轉輪聖王家の
血統だ、さつきも志村が申した通り世界中の人を救ふ爲
に世界中の人が持たねばならぬ道を持つて、それを保護
して世の中を救はうと云ふ、斯う云ふ爲に天然自然に世

正義正道の權威

轉輪聖王家

「十六ノ菊」を帝室
の御紋章とするこ
とに就て、予は之
を轉輪聖王家の輪
寶の修治せられし
形章なりとの考を
有す詳しくは「世
界統一の天業」を
見よ

遺憾なる哉世の解説
は顛倒せり矣

の中なかに立たて居ゐる世界せかいを保護ほごし維持みぢする轉輪聖王家てんりんじやうわけいの家いへだ
轉輪聖王家てんりんじやうわけいと云いふ名なは、佛ほとけのお説ときになつたので、日蓮にちれん
聖人しやうにんに依よつて日本にほんの帝室ていしつが轉輪聖王家てんりんじやうわけいで世界せかいを統一とういつする王わう
統とうである、斯かう云いふことが分わかつた、私わたしが之これを盛さかんに言い
つて居ゐるから私わたしの新發明しんはつめいのやうに世間せけんでは誤あやまつて居ゐるけ
れども、私わたしは發明はつめいする程ほどの智慧ちゑを持つて居ゐらぬ、日蓮聖人にちれんしやうにん
に依よつて是これは分わかつた、其内容そのないようを言いはなければ日本にほんと云いふ國くに
は何所どこがえらいか分わからない、日本にほんのえらいのは、皇統連綿くわうとうれんめん
綿萬世めんばんせい一系いつけいと直ちかに言いふが、皇統連綿萬世一系くわうとうれんめんばんせいいつけいはえらいも
のてはない、皇統連綿萬世一系くわうとうれんめんばんせいいつけいであるから日本にほんはえらい

皇統連綿萬世一系のよつて來る原因に向て稽首せよ

薄弱淺膚なる帝室論は眞に「ありがためいわく」なる哉

のではない、逆まだ、日本はえらいから皇統連綿萬世一系なのである、是は福澤諭吉君等が爾いふ間違たことを教へて呉れたので誠に困る、日本が貴いと云ふのは萬世一系だから貴い、皇統連綿で古いから貴い、どんな道具でも古いものは値打が出ると云つて、古道具と一緒にするのには失敬千萬な話で、二千五百年経たらうが三千年経たらうが、又新しからうが貴いものは貴い、商店の番頭が出世でもしはしまいし、そんな譯のものではない、道具や何かと一緒にされては堪らない、それでは古くなかつたらどうする、萬世一系皇統連綿でなかつたらどうする、

「道の家」より建てられたる「道の國」

偶々爾であつたから貴いと云ふなら「珍らしくあれ迄になつたから貴んでやれ」と斯う云ふことになる、決してさう云ふ意味ではない、萬世一系天壤無窮と云ふ事には其根源がある、「其根源」が貴い、其は何か「道」といふ事である、則ち世の諸の邪に曲れる汚き私の事どもを正して世を救ふ爲に建られた「道の家」である。世間に道路の普請をしたとか堤を修めたとか云ふ、公益の爲に盡したと云ふて褒賞する、是は自分のことを儲措て世の中の爲を計つたと云ふことに依て其徳を認められた、多くの人は先づ人の方は侵しても自分の方を宜く

天地法界皆我爲
に存す萬物我に
備はるの前我れ
先づ萬物に具へ
らる

て居るので、どっちへも倒れない、自分一人て立つと云ふことは出来ない、所が其自分を立てやうと云ふ爲に其上や下や其隣近所を亡ぼして仕舞ふ、さうして自分だけ宜ければ宜いと云ふので、相欺いて他の者をば壓倒することを考へたならば、其壓倒した目的は達しても自分が凭掛かる所は無くなつて仕舞ふ、大地が無くなつて仕舞つたら自分は立つことが出来ない、天が無くなつて仕舞つたならば自分を覆ふものが無い、天も地も自分の爲め、風も水も自分の爲め、山野も大海も己れを養ふ爲に天地間に存在して居る、何所の土を掘つても水が出て来て掘

日月山河光々融々

唇破れて齒寒し

る者が之を飲むことが出来る、何所から掘て來ても飲むことが出来る、太陽がある、日向へ出さへすれば誰の頭へでも光があたる、太陽の方ではあてやうと云つて待て居る譯ぢやないけれども、外へ出てあたる事が出来れば太陽も矢張り自分の爲にあるので、是が無くなつて仕舞たら大事件、水が無くなつても火が無くなつても地が無くなつても大事件、己れを安んぜんが爲には他の周囲の色々なものを安全にして置かなければならぬ、唇破れて齒寒し、そこで唇を保護して置いて齒を庇ふ、是は利害問題であるが、利害問題から言つてさへさう云ふ譯のも

道○の○人○
道○の○國○
く○く○

ら其亭主は何と思ひますか、さう云ふ家來が出来たら其主人はどう云ふ感化を受けるか、一家仁なれば一國仁に興るで、その家は霽々として眞に春の如き暖かき風が吹くに至るであらう、それが即ち道の人なんだ、國も其通りだ、道の國と云ふ國が無ければならぬ、道でない國と云ふのは他の國をば壓倒して、あいつは弱さうだからあれを取ってこつちの領分にしやうと云ってやるのが、丁度隣の畑を一鋤取って來ると同じやうな筆法である、今の列國など、云ふものは文明國だとか先進國だとか云つても、腹の中では皆さうぢや、ちよつと軍艦や鐵砲や法

文明を以て裝飾せ
る、神様御免の強
盜、平和會議の歸り
途には、アームスト
ロング會社の御客さ
まとなる、神よそち
ら向きませア
ン。

律や議論や交際や色々なもので裝飾してある、山師の開業式みたやうに酸漿提灯や何かぶら下げて飾つてあるから良く見えるけれども、腹を割つて見れば人の國を取る盗人だ、何處か弱さうなやつがあれば取つて來やうと云ふ考、自分の方を取られると怒るが、自分の方を取られないで一方を取ば、お前がそつちを取るの黙つて居てやる、其代り己れにこつちを寄越せと云ふやうなことて同盟が成立つ、何々同盟と云つてこつちへくつ付いたりあつちへくつ付いたりする、日英同盟なんて言ふかと思ふと日露同盟が出来るとも知れない、今の所では日本は

娘一人に婿八人、花の終りは喧嘩とよ

「ミストル日本」

娘一人に婿八人で、日本さんくくと云ってやッて来る、殊にバルカン半島の事件がどうなるか、トルコで獨立を失ふやうに至つたならば、日本支那の外東洋に獨立國は無くなつて仕舞ふ、だから支那の問題が世界各國を擧げのの大波瀾の問題になる、其所へ行くと日本だ、日本は座頭だ、千兩役者で、露西亞の方からも日本さんと云ッてやッて来る、英吉利の方でもミストル日本とか何とか云ッてやッて来る、佛蘭西も其通り方々から日本と仲をよくしてやらうと云ふやうな風になつて一大騒動が惹起らぬとも限らぬ、是れ皆利害得失の問題で、文明だの何

「神は我等と共に在り」嗟この不思議なる神よ

是非かりろ 巴 雷
油斷のならぬ
アイヌ哉

だのと云ッても皆それだ、「神は我等と共に在り」と獨逸皇帝が露西亞皇帝を見舞た時に言たさうであるが、耶穌教の神様は知らぬけれども、幾ら人の好い神様だッて泥棒と一緒にされては怒るだらう、弱い者を壓倒する、少し何か事件があるとそれに乘じて兵を遣ッて、貧乏な奴に金を借りる金を借りると云ふ、借りなければ承知しない兵力の上で金を貸すと云ふ、貸せと云ふのなら分ッて居るが、借ると云ふのだから是は餘程をかしい、往古は美人などを贈ッて色仕掛で陥れやうと云ふやうな手段までも行つたものである實に驚くべきことで、一方に於て

●●●
聖國主義

日本國の種子は
「正」の一字なり

は『神は我等と共に在り矣アーメン』とやツて、一方では泥棒をする。

それだから 神武天皇は此日本を御建てになる時に、斯の如き事が永久に人間世界にあつては大變だから之を悉く亡くして仕舞ツて、一の聖國正義の下に寄せなければならぬと云ツて、正義の爲に此國を建てられた、此國の魂をば 神武天皇は「正」と仰せられた、『正』そのものには種がある、何でも種の無いものはない、瓜の種を蒔けば茄子は出来ない、瓜から瓜が出て茄子から茄子が出る如く種と云ふものがある、日本と云ふ國の種は此

聖人世に臨むの
要は「治」の一字
なり

「正」の一字、日蓮聖人は「立正安國」と仰せられ、神武天皇は「暉を重ね、正を養ふ」と仰せられた、正を養はんが爲に天日嗣の位に即ぐぞと仰せられた、天照太神は「治」と仰せられた、「治」と云ふことは物を整理すること、物を整理するには中心を定めて掛からなければならぬ、中心を定めなければ整理は付かない、物の土臺目安が分らなければ治めることは出来ない、天照大神は「治」の一字を以て元とせられ 神武天皇は此國體の内容を「正」の一字を以て示された、日蓮聖人は「正を立てる」と云ひ、釋迦如來は「正法を以て國を治める」

「正」とは「妙」なり、語原に於て一なり

(古歌に)
妙の字は
若き女の
もつれ髪
いふにいはず
とくにとかれず

「實」「寔」「日」「正」其義同源也

と仰せられ、觀普賢經の中に「正法治國」と云ふことがある、妙法蓮華經の「妙」と云ふことは、羅什三藏は之を妙と翻譯しましたが、天竺の言葉では「薩達磨芬陀梨伽蘇多覽」この「薩」とは即ち正しいと云ふことであるが、羅什三藏は此「正」へ少しうま味を出す爲に味淋をかけて「妙」としたが其内容は正の字である、今私が此所へ来て札を見たら「國民教育佛敎實義演說」とある、宜しい、國民教育に違ひない、佛敎實義に違ひない、實義の實の字は寔と云ふ字、寔と云ふ字は昔の日月の「日」と云ふ字と通用したものです、之を見ると日と云ふもの

日の神、日の國、日の子孫

も矢張り「實」である、物の中心を日と云ふ、天界の中心は日である、形で見ても◎圓い物があつて眞中に點があるのが日の字、唯點ばかり居るのも退窟だから少し光ツて見やうと云ふので周圍◎へ光を現はした、此眞中の點は何だらう、團子だらうか饅頭だらうか何だらう是は「正」と云ふ字だ、◎此國の先祖は 天照大日靈貴と云つて日の神様、神武天皇は神日本磐余彦尊と云ひ我は日の神の末なりと 神武天皇自から宣言なすつた「日」の子孫であるから、日に向つて戦争をしてはならぬと云つて、日を後に脊負つて長髓彦を御征伐になつた、

「日蓮」の名は「日本」の如く意義深く且つ大なるものあるなり。

「日」は「物」の中。

此國は日の本と書て日本、國體を解決する爲に現れた日蓮聖人は自ら日蓮と名乗られた、是も阿父さんが日兵衛とかいふので日蓮と云つたのではない、「自解佛乘とも謂ふべし」と云つて譯があつて日蓮と云つた、お釋迦様の名はと云ふと「日種」だ、日の種と云ふ人が説た法華經がこの日本國體の内容ぢやと云ふとを日本へ弘めに出た聖人が「日蓮」、其國が「日本」、其御先祖が「天照太神」、皆「日」だ、日本人の頭がカン／＼焼けて居る譯でも何でも無いが、かくの如くすべてに日を理想として居る、日と云ふものは天象の中心だ、物には主が無ければなら

心にして亦これ「事」の中心なり「中心」を以て「萬物」を統一する基本と定む

●●●
權と實

ぬ、車て言へば軸だ、中心が無ければならぬから、一切萬物の中心を以て物を整理すると云ふ理想を此國の心とする、それが日本の國體である、であるから其心持で萬物の物をば集めて来て、それを正しく整理して行くと云ふ國體が其所へ出て来る、その國體は「正」といふことで、此國の文明の一切に亘つての「種」である。

七 種の教

佛教はこの「種」の教である、但し種に就ては「種」そのものと、それから「種」をそだてる方法準備との二つがある、即ち「權」と「實」との二つである、そこで

『衆生の性欲同じか
らざる故に種々に法
を説く種々に法を説
くことは方便の力を説
以てす』とは無量義
經の金文ならずや。

權と云ふのは假だ、方便だ、權の字ははかると云ふ字だ
權衡と云ひませう、「秤」がなぜ權だと云ふと、秤と云ふ
ものは自分の目方と云ふものはきめて置けない、自分の
目方をきめて置く秤はない、はかる方の品物次第でどう
でもなつて居なければ物を量ることは出来ない、十匁の
物が出て来れば十匁の所へ分銅をやる、百匁の物は百匁
の所へやる、百匁の物には百匁、五十匁の物には五十匁
の所に分銅が行くから「秤」だ、秤自身には目方は無い
然るに秤の分銅が己れは百匁にきまつて居る、五十匁の
物が来たつて量らぬと云つたら秤の役に立たぬ、權と云

巴雷
甘い辛い
四十二年の
お伽かな

ふのは假だから甘い物が好きなら甘い物を與へ辛い物が
好きなら辛い物を與へる、子供に物を教へるやうなもの
で、「此所までお出て甘酒進上」と云つてやる、それが量
る、向ふをはかつて向ふに應じて目方をきめる、である
から實際の一定の道ではない、「佛教方便多きに居る」と
云つて十のものは九までは「權」、一體佛五十年の説法中
八年の法華經を除くの外は皆「權」だ、是は私がきめた
のではない釋尊が既にきめたので、「已に説き今説き當に
説かん」是皆權教、法華經のみ實教だ、種々に法を説く
のも方便の力、五十年の中、終の八年だけの説法は眞實

●●●●●●●●●●
人間の整理法

「實」は「種」なり
「權」は耕作なり

を現はしたが、四十餘年の間眞實を顯はさない、是は何の爲かと云ふと、さうしなければ人間の整理が付かない法を説くにも人間の整理が付かなければ説くことが出来ない、たとへて見ると佛教の眞實と言ふのは「種」のやうなもの、「權」と云ふのは種を下す準備に土を柔かにして肥料をやったり草を採ったり水を入れたり耕したりする方法のやうなもの、肥料をやらなければ物は出来ないうし能くうなはなければ物は出来ないけれども、唯うなうたばかりでは米は出来ない、どんな名人の百姓が朝から晩まで三百六十五日田をうなうたうたうた「種」を蒔かな

巴雷
わけ登る
徑にころんで
寒念佛

ければ米にはならない、種が實教ぢや、色々田をうなうたり草を採ったりするのが權教だ、それを「準備」も「種」も一つにして佛法と云へばオンアポキヤードも南無阿彌陀佛でも皆同じ事と言つて仕舞つて、「宗旨論どつちが負けても釋迦の恥」「分登る麓の道は多かれど同じ雲井の月を見る哉」法華が宜い者は法華、念佛が宜ければ念佛、穩かにしたら宜からう、ト斯う云ふやうなことを懶巧さうな馬鹿が言つて居る、元々それ等は佛法を學ばぬから分らぬ、種も肥料も一緒にして仕舞ふ、そんなら彼等は肥料を食ふか、米へ肥料をかけるより飯へ肥料をか

日本○の○宗○旨○と
い○ふ○も○の○あ○り○、
日○本○人○は○何○よ○り○
も○先○づ○之○を○知○ら○
ざ○る○べ○か○ら○ず○

けたら尙ほ宜からう、鰻飯や親子井と云ふのは聞たが黄
金飯と云ふのはまだ聞たことはない、其所なんだ、『準備』
と『種』と二つあることを知らなくては行かない、準備
を種だと云ふから承知しない、種が無いと云ふことはな
い、日本の種は『正』の字だ、法華經も『正』の字、先
刻山川が「本化佛教と日本國體」と云ふ題で演説した、
時間が無いので十分に話が出来なかつたが其ことだ、日
蓮聖人が現れて法華經の正義を以て日本の國體とする、
日蓮主義と云ふものは日本人の宗旨だ、日蓮宗の宗旨だ
と思ふから行けない、法華宗のお祖師様だと考へて居る

日本○の○柱○、日本○
の○眼○目○、日本○の○
大○船○。
日本○の○祖○師○、日○
本○の○道○の○祖○師○、

から間違へる、此宗旨の人もさう云ふ風に思ひ、おらが
方の宗旨の先祖とこんなやうに言ふが、日蓮宗のお祖師
様ぢやない『日蓮は何れの宗の元祖にもあらず又末葉に
もあらず』とあつて、法華宗などいふ一團の特種部落
的のものを拵へて其親方にならうと云ふ考はない、『我れ
日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本
の大船とならん、等と誓ひし願破るべからず』是が日蓮
聖人の思召で、「身延の柱」となるとも「池上の柱」とな
るとも書いてない、『日本の柱』だ、さうして見れば日本の
祖師である、日本の祖師であるから、私は日蓮聖人をば

即ち日本の國聖、日本は世界の師導國なれば、その國聖はやがて、世界唯一の大聖主なり

●日本は世界の中心なり
●『世界中心論』參看
●あゝ承久三年の

『國聖』と云ふ、日本國の聖人と云ふことだ、さうすると亞米利加の聖人とか英吉利の聖人とか云ふ者もありさうに思ふが、日本と云ふ國は世界を救ふ爲に出來た國である、法華經が世界を救ふ爲めの教であるから、世界を救ふ爲には、先づ日本が道の國であることを固めねばならぬ、故に日本が世界の中心たる事、及び其「國聖」を知ることに力を入れるのである。

八種の教の師導者

上人は此國に承久三年の翌年即ち貞應元年に御出現になつた、承久三年には日本が一遍國體の上に於て潰れ

●日本

●日本の祖神を以て直に世界の先祖と宣示せるは、即ち世界統一の國體を示せる所なり

●先づ種を擇べ

た時だ、國はちやんとして居たが、北條義時が三天皇をば島流しにし奉つた、陪臣が國政を執つて天子をば廢立するなど、云ふのは冠履顛倒も甚しい、此國體の大瑕瑾の現れたのは即ちこの承久三年である、其翌年日蓮聖人が御降誕あつて遂に世界第一の本尊を建立した、其本尊の中心たる中尊の下に日本の先祖を列ねて世界の先祖とした、天照八幡の兩神は日本の先祖であると同時に世界の先祖であることと云ふことを唱導して、日本建國の趣旨と同じ意味で法華經を以て世界を統一すると云ふ、國體の根本に依て之を主張せられた、それが『種』の方だ

●●●●●●●●●●
日本國體の内容

種が良くなければならぬ、『肥料』も必要ではあるが『種』を蒔くことを忘れたならば何にもならない、道徳も政治も經濟も結構である、凡そ世の中にある所の人間に入用なものも皆結構であるけれども、それは『種』の爲に皆結構である、種の爲に入用である、肥料も結構、田の草採るのも結構、水をやるのも結構であるけれどもそれは種を育てんが爲にやるのであつて、『種』と云ふ物が無ければ幾ら肥料をかけても何の役にも立たぬ、此に於て諸君は『種』とは何であるかと言ふであらう、自分が是から説かうとする種とは日本の國體である、日本の國體は

『正』の一字を以て現はすべきものである、その内容は正しく日蓮聖人によりて傳へられた法華經の正義である。

九 種の教の體現者

我國中興の英主たる 明治天皇陛下の御盛徳が、果して御修養に出でたるものであるか或は天稟の御性質に出たものであるかと云ふ問題に就て、自分はさうでない、修養から來つた御盛徳でもなければ又御天稟から來たと云ふばかりではない、即ち是は 陛下が深く國體と云ふことを御自覺なされた、其發表が斯の如く盛徳となつて現れたものであると云ふ解決を下して、我が日本國の今

●●●●●●●●●●
御自覺の發表

國家は須らく大に覺醒すべし

日及び將來に於ける、吾國民の國家的、大覺醒の初歩とせんければならぬと云ふ覺悟を以て、これを講ずるのであるから、諸君も深く思惟して戴きたいのである。

そこで種の教の體現者、即ち此國體の權化！「權化」と云ふことは假に現れたるものと云ふことで、即ち佛語

に「權化」とか「權現」とか云ふ事がある、(何々權現等)權現と云ふのは矢張り假に現はれる、天上の一月が影萬

水に浮ぶが如くに一つの如來の徳から種々様々な形を現はして人を教化すると斯う云ふので、佛が佛の御自前の

形をあらはさずして他の形を現はして佛の○○○○○を行ふと云

●●●●●
一月萬影の理

家康を祀て權現とせり、は頗る僭上の嫌あり、もと所謂實迷神の種にも過ぎず、之を以て神若しくはそれ以上は聖位とすは、謂はれなきに似たり、勅號なりといふとも元と之を要し、ふも元とのなれば、畢竟は權勢の威の結果に過ぎ

ふ場合に「權現」と云ひ或は「權化」とも云ふ、佛てなくとも菩薩でも、觀世音菩薩は三十三身に身を現ずるとあつて、或は天の大將軍の身を現ずることがある、或は羅漢のやうな身を現ずることがある、或は女の身を現じて人を教化する、道の宜きに從つた場合の利益ある體を現じて人を導く、是が觀音の三十三身、妙音菩薩は三十四身と云つて、これも色々の身を變現して人を教化すると云ふことが佛經に説てある、それを權現と云ふ、昔神様を尊んで權現と云ふ、何々大權現、富士淺間大權現、或は家康なども神に祀つて東照大權現などと云ふ、それ

日本國も世界も其究竟の解決は唯この「日本國體の自覺」といふ一事に歸着す

は道が假に人に現れて來たと云ふ意味のことを申します「權化」と云ふこともそれと同じことで、化は「ばける」と云ふこと、即ち此 明治天皇は國體の權化であるそれを内容的に論じ來る時は、即ち 陛下の御盛徳は國體の自覺より來つたものであると云ふ結論に成て來る、此「國體の自覺」と云ふことは、非常に大切なことであつて、これが殊に 明治天皇の偉大なる御性格を示現した原動力で、又日本建國の 皇猷を中外に輝かし、未曾有の徳澤光輝を此人生に垂れさせられた土臺であつた事は勿論、未來の世界的大解決の一大標準であります。

十 國體の自覺を失へる今の日本

國のすべての事實と勢力とを根本より解決する唯一の方法

國體の自覺といふことは、ひとり 明治天皇の御盛徳を論ずる上に就ての話ばかりではありませぬ、是は日本國の今日に於て、あらゆる思想界、政治經濟等の各事實の方面、或は之をもつと適切に申せば實業である、一般のこの國力、國運を發展すべき所の國の總ての事實及び勢力、皆この國體の自覺と云ふことから現はれて來なければならぬのである、然るに今日は國の政治でも教育でも或は又文藝美術工藝等、時々刻々に變遷する所の嗜好風俗、總ての事柄が皆國體と云ふことの自覺を缺て居る

●日本みづからが
●日本の趣意にそ
●ひく何等の倒惑
●肺病やみに緋緘
●の鎧！

「國體の自覺」を缺て居ると云ふことは、即ち日本自からが日本の趣意に背いて居ると云ふことに歸着するので、魂が抜けて居る！ その魂が抜けて居る所へ、學問をして見たり金を拵へて見たり交際をして見たり美しい着物を着て見たりしても、肺病やみが緋緘の鎧を着たやうなものである、辨慶、樊噲のやうな勇者が緋緘の鎧を着てからに三十五斤の鐵材棒を振廻して、太く逞ましき馬に打乗ってピカ／＼光った武器で軍に出たと云へばいかさま氣丈夫で、美事でもあるし鎧も効を成さうが、今死ぬか分らぬ肺病やみ、有るか無いか分らぬ皮だけで生き

□文藝獎勵の效果如何
□通俗教育會は如何、
□三教會同は如何、
□八金天神社は如何、

て居るやうな者が三十五斤の鐵材棒を脊負はされた所が仕方がない、今政府は大變心配をして教育を獎勵したり風俗の矯正とか、神社の崇敬とか頻りに民風の改善を計つて居るので、決して忘れて居る譯ではない、隨分骨を折つて居る、通俗教育會のやうなものも拵へて居るし文藝何とか云ふやうなものも拵へて小説の世話までも焼て居る、方々には學校があつてどん／＼教育して居る、宗教もそれ／＼働いてるのでせう、佛敎家は比較的活動は鈍いが、基督教徒などは盛んにやつて居る、けれども魂を失つて居るのである、魂が無いのに無闇に種々な

國體に構はぬ文明、いくら達者でも間男の兒也

中和性の文明と、反撥性の文明とは、天かに別なり、之を混ざるが故に、國體思想は失はれ、固有の文明は傷けらる。

ものを押込んで到底要領を得られない、兎に角宗教も學校もほとんど國體と云ふ自覺を喪失して居るから、文明と云へば今日の所ては唯西洋の文明である。

十一 名分先づ亂る

西洋の文明も悪むることはない、結構だけれども、西洋の文明には日本の國體と一致する文明と、一致しない文明とがある、日本の國體と一致しないのみならず日本の國體と反対した思想がある、反対しやうが一致しないが、何でも文明は西洋が本家だと考へて、西洋でさへあれば宜い、バタ臭くペンキ臭くありさへすれば文明だと

孔聖曰く「必ずや名を正さんか」

「ジャバン」といふ國

考へて唯無茶苦茶に西洋がツて居る、例へば「日本」と云ふ立派な國の名があるのに、外國と交際するに就ては曲げて「ジャバン」と呼んで居る、いかにもをかしい、先年或商人が亞米利加の博覽會へ商品を出すのに「大日本何所其所の何の誰」と書た、さうすると亞米利加の博覽會は之を受附けない、大日本と云ふ國は無い、矢張りジャバンのことだらう、「ジャバン」と云ふ國はあるけれども「日本」と云ふ國はない、日本と云ふ國とは交際しないから出品を受附けることは出来ぬと斷はつた、日本の方の役人も其出品者に向つて、確か東京の商人であつ

この商人の名を聞かまほし

一語森嚴

斷々乎として正音に復すべし

たと思ふが「ジヤバン」と書かぬと通らぬ、日本同志では日本と云ツて居るけれども、外國では「ジヤバン」と云ふから、「ジヤバン東京何所何所の誰」と斯う書なれば行かぬと、日本の役人が其商人に言ツた、所が此商人は「さうですか、私は日本人であつて、ジヤバン人ぢやない、私の國は日本と云ふ國だ、日本と云ふ國の人が日本と書てそれが通らないならば出品は御免蒙る」と云ツてとうとう其品物を出さなかつた、其人の名を聞損ツて甚だ残念だが、日本にも未ださう云ふ氣骨のある人間があるかと思ツて愉快である、「日本」と發音して居るも

のを「ジヤバン」とする必要はないから、是はさつさと關係諸國へ改正を申渡したら宜いではないか。

曾て露西亞のことを「魯國」と書いたことがある、是は日本の字を宛て、符牒のやうに言ふ、丁度「英國」とか「米國」とか云ふやうなものです、日本では英國公使館などと云ツて居るけれども向ふでは知りはしない、こつちだけで「英吉利」なり「米利堅」なりの一番上の借音字を取ツて「英國」と云ひ、「米國」と云ツたので、元向ふとこつちとの間に通用した言葉でないから何と言ツても構はない、だから露西亞と云ふのを略して借音で

英國とて英雄の國にあらざ、米國とて米の出來る國にあらざ、佛國豈に如來の國ならんや

●露●國●猶●こ●の●氣●骨●
●あ●り●、●日●本●人●た●
●る●も●の●愧●死●す●べ●
●さ●な●り●

「魯」の字を書て魯國／＼と云つて居た、所が其時の露國の公使が此「魯」の字を段々日本の字典で引いて見ると「おろか」といふ字、馬鹿の者を魯鈍といふ其魯鈍の「魯」の字を書いた、けれども日本ではロシア人は馬鹿だからと云つて其「魯」の字を書たんぢやない、昔から支那にも「魯」の字をば國名に用ゐたことがある、孔子様の生れた國が「魯」と云ふ國だ、地名に慣例のある字だからちよつと日本では洒落て、孔子の生れた國の名前のことだから、決して悪い量見て附けたんぢやない、所が魯西亞の公使は「おろか」と云ふ字だと云ふので抗議を持

(開戦の歌)
皇軍一戦敵艦を。
咄嗟の間に破りた
り。勃海灣頭昇る日
の影に消行く露の
國。

込んだ、外務省に向つて「ろ」の字は幾らもあらうに此「魯」の字を使つたのは我國を馬鹿にした様で穩でないから、外の字と變へてくれと抗議を申込んで来た、こちらも元々悪い氣で附けた譯でないから、然ば換へて他の罪の無い字に致しませうと云ふので、あの「露」と云ふ字にした、(それだから戦争の時にとら／＼日本の日に照されて露國の露がとけて仕舞つた)、可愛らしい無邪氣な字だからと云ふので「露」と云ふ字にあらためた、文字は「露」だつて「魯」だつて義を取つたんぢやない、音を取つたんだから構ひさうもないものだが、さて「ろ」

日本政府にて發行する文書類にも此種の文字使用あり苦々しき事共なり予會て外國より來れる爲替の領收用紙に「左行」とある氏名を記す式に氏名を記すに書く郵便局と主として「郵便局」といふ然らば予は金を請取るまじ予は日本なるが故に、斷じて日本の風に從は

す、所が西洋の字は左から書く、西洋の字を書くんなら左からやるのが當然だが、日本の字を書くんなら右からやッたら宜さうなもの、それを態々横に左から書たものがあるが是は何の爲めだ、能くあるです東京などには幾らもある、「理髮店」などもまさか「店髮理」とは讀まないけれども、左から書て西洋がッた積りて居る、がッた位で濟めば宜いけれども、恐らく是が日本人の自覺を失つて居ると云ふ一つの證據だらうと思ふ、第一事實上間違が生じて來る、軍艦に「三笠」と云ふのがあり又「相模」と云ふ軍艦がある、あれを假名で書てそれを西洋

ん、金錢の爲に氣節を枉げじと喝破して當局者を折きたることあり。

良さを取り悪しさを捨てよとなり、取るといふこと、溺れるといふこと、は全然別なり

風に考へて左から讀むと、三笠が「さかみ」となり、相模が「みかさ」と讀まれて飛でもない相異になる、若し書きかたに規律が紊れたら、それが爲めどんな間違が出るか、しれない、さりとして私は必しも西洋の思想や西洋の風俗をば絶対に拒むと云ふのではない、良いものは用ゐる、文明は西洋の文明と云ふ譯ではないから良いものは採つて用ゐるが宜い、其代りこつちの文明も世界の文明だから向ふへやるが宜い、併ながらそれを採つて用ゐる上に於て自國の獨立までも危くするとか、自國の尊嚴までも傷けると云ふやうなことをして、必ず彼の風俗を

つぎはぎ文明

眞似んければならぬと云ふ理窟はない、日本が今日まで建國以來二千五百年の現時に至つて、自國の文明を消失して仕舞つて、外國のつぎはぎ文明で變挺なものを拵えて、西洋では二十世紀の文明と申して居る、此二十世紀と云ふことは進歩した時代といふことを意味して居る、其進歩してゐる時代にあつて日本はどうである、馬鹿馬鹿しく退歩した事が多い。

十三 うそつき病

大體日本人は昔から嘘をつかない人間であつた、餘りに卒直過ぎて飾りが無さ過ぎて剝出しのやうな國風の人に

巴雷

○賣人

かけるから
ねぎると客は
いふけれど

ねぎられる故
懸價するなり

○買人

ねぎるから
懸價をすると
いふけれど

懸價ある故
ねぎるなりけり

間であつた、それが今日は殆ど嘘を以て固めたやうだ、別に悪くない事でもちよいと下らぬ嘘をつく、商人が物を賣るのに謂れなく不當な嘘偽を言つて物を賣らうとする、買ふ者も、又それが元價の切れると云ふことを腹で承知して居ながら、牽制的に賤く値切らうとすると値切る奴があるから懸値を言ふと斯う云ふけれども、懸値を言ふから値切るのだといふ、賣る人と買ふ人と頭の中にはあいつが嘘をつくから、こつちも嘘をつかうと云ふ、互いに嘘の機關砲を頭の中に仕掛けて置く、此コッブは幾らだ、是は實は二十錢で仕入れて來て二十五錢位

●何●等●の●侮●辱●!
●何●等●の●卑●屈●!?

間は此通りにしなれば乗逃げをする人間でしようか、それから東京市民も其「乗換切符」を何とも思はず平氣で『オイ乗換切符をお呉れ』とか何とか云ってそれを帽子などに挟んですまして居る、所の銚を入れて貰ひ時間の銚をもお願ひして、私は危険人物なんだから何分宜しくお頼み申します、それぢやア所の嘘をつかないやうに一つ銚を入れてやらう、もう一つ時間の嘘をつかないやうに銚を入れてやらう、こんなにされて、二百萬の人間の中一人も鐵道會社なり市の電氣局なりへ向つて抗議を申込んだ者が無い、それでは市民を侮辱して相濟まぬか

そろばんの
お化に怖ぬ
強さかな
巴雷

らと云つて「乗換切符」なしでやつたらどうなる、まるで乗逃げをする、一枚の切符で電車に三十遍も五十遍も乗るものがある、それだからさう云ふ侮辱を加へられて居る、あの「乗換切符」は算盤の化物と云ふ名が付いて居るが
算盤の
やうな
細長い
切符で
す、それに所の銚時間の銚何時分まで入れる如何にも

●●●●●
侮辱のお札

むかし女あり、産に
臨んで惱重し、其夫
傍らに在りて頻りに
金毘羅大神を念ず、
曰く「あはれ此産を
安からしめたまへ、
安産の上は黄金の鳥
居を獻納せん」と妻

こせついで居る、先づ大國の襟度は儲措て、此東京二百
萬の市民が、東京市自から營んで居る電車の爲に、斯の
如き侮辱的宣言を蒙り、さうしてあの侮辱のお札を貰ッ
て悦んで居る、是は實に情けない話だ。

十五 黄金人種

日本は佛敎國だと云ひ、或は神國だと云ふ、神國だけ
でも澤山の所へ、佛敎國なら尙更のこと、神様と佛様と
兩方で番をして居る國が、耶蘇敎國の（昔は西洋人を
かまへて獸だと云つて馬鹿にした、毛唐人だと云つて獸
を意味した言葉で之を侮辱した、其侮辱した）毛唐人に

苦しき中にも之を聞
て驚き怪み、「何條さる
苦の中に、何條さる
約束を遂げ得ん」と
いふ、夫曰く「早く
言て居るうちに早く
産んでしまふ、早く
よ」と神をも欺かん
とするなりけり。

も劣つて居るではないか、神佛兩方で持つて居る大した
國が、そんなに嘘つきや乗逃げ人種を出すとは情けない
西洋では公園などに果物が澤山生つて居ても一人も之を
採る者が無いといふ、電車や汽車も至極簡單であるとい
ふ、西洋人が日本へ來ると汽車へ乗るに、切符だとか荷
物のチエツキだとか、急行券だとか幾つも出されるので
日本の旅行は宜いけれども之で不愉快で叶はぬと云ふそ
うだ、是だけ風俗が違ふと云ふのは研究物だ、それでは
西洋の國柄が優れて居つてそれだけ良い人民が出來たの
か、日本の國柄が大體が悪くつてさう云ふ風になつたの

『吾々劣等人種』
咄何等の卑屈
無慚なる言艸ぞ
や。

●●●●●
人種的迷信

かと云ふことを考へると、先づ多くの人は此日本と云ふ
國は國柄が劣つて居ると云ふ如くに考へて居る、『吾々劣
等人種が』などと云ふ人がある、日本人の癖にそんな
ことを言ふ、西洋人は色が白いから優等人種だと云ふ、
是は西洋人自からは、人間の上等なのは色の白いもので
何の色でも色の着いて居る人間は下等人種であると云ふ
迷信を持つて居る、是は西洋人の一つの病ですな、自か
ら『白哲人種』と稱して色の白い人種はあらゆる人種中
一番上等な人種で、之に亞ぐのが黄いので、あとは銅色
にそれから黒、黒なんと云ふのは下等なんだから奴隷に

よし世
置く露も
はなのかほりも
秋のいろ
何か隔てむ
黄菊白菊

群榮萌○
花芬○
白黄天地文○

使へば宜い、種々の壓迫を加へて人間に階級を付けて居
る、日本人などは西洋人の眼から見ると黄い、是は白と
黒の合の子だ、どう考へても未だ白には及ばないが、黒
ほど下等ではない等と失禮にも品評をして、それで之を
『黄色人種』と名けて居る、所が日本人自から西洋の感
化を受け、西洋の思想を良いものと考へて、『吾々有色人
種』がとか『吾々劣等人種』とか云ふ、色が白くないと脊の
低いを以て劣等として居る、是は諸君どうです、あなた
方は之に甘んじますか、諸君は矢張り黄ろい！、故に黄
い方の人間は劣つたものと考へます乎、私は之に就ては

●●●●●●●●●●
客性の變調

文字の書き方から身形風俗までも西洋に屈伏するとは、
いかにも情けない非名分の振舞である、けれども國風民
俗の上に於て、斯くウツをつき乗逃げをするものが多い
といふことは、たしかに西洋に劣つて居るのである、そ
れは何の故であらう、日本人は固有の劣等性格なのであ
らうか、將又中途からの客性によるのであらうか：：中
途からである！ 中途からである！！ 日本の固有性格は
嘘をつかない人種である、それが斯くも嘘をつき乗逃げ
をする様になつたのは、固有性を忘れたからである、即
ち國體の自覺を喪つたから來つたのである。

十七 清潔人種

△△△△△△△△△△
外國の文明に誤
られたる日本の
民性

日本國固有の民俗は、嘘をつかない、尤も清潔な素直
の性格であつた、神代以來天性の生しのままに素樸質
直にして、毫も紛飾葛藤のない民性であつたのが、中古
段々と佛教や儒教のために民性を動搖されたのである、
近來に至つては、西洋の惡思想、ことに基督教の惡感化
が、随分と吾固有民性を傷害して居るのは、眼前の事實
である。

清潔を理想とした民族は、たしかに神聖種族たるの證
據である、抑も教の極古いといふ傳へは、「七佛通誠偈」

清淨は道德の根源なり

蓮華の表示

としてある、日本の最古代にも古佛の遺法が傳來して居つたに違いないことは、神武建國の規模でわかる、一體道德の根源とは清いといふことに在る、釋迦如來が佛法を説かぬ前から「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛敎」と云て『諸の惡は作す莫れ衆の善は勤め行へ自か其意を淨くせよ、是れ諸佛の敎なり』とある、斯う云ふ僅かな偈だけれども、心を淨くすると云ふことが道德の根源になつて居る、佛法では清いと云ふことの基礎の上に、諸の理想も感情も意志も皆之に準用して、道德の地盤を据えることをば獎勵せられて居る、であるから佛

の表徴に蓮華がある、蓮華へ乗つて居るとか或は蓮華を持つて居る、妙法蓮華經の蓮華と云ふことは淨いと云ふことを例へてある、蓮華ばかりは何物を以て淨くしなくとも、自體汚い泥の中から出て來て居ながら淨い、他の汚いものにけがされない、華でも葉でもどんなものにも必ず汚ない物に染まない、珠にしてころ／＼と落して仕舞ふ、非常に淨い、さう云ふ汚れを受けないやうな正當防衛法をちやんと性來に持つた淨いものだと云ふので、佛は蓮華をば道德の表象として居る、佛様が蓮華へ乗つて居ると云ふけれども、何も佛様が乗るやうな大きな蓮

自性清淨

●●●坐寶蓮華●●●

華があるかも知れぬけれども、それにした所が動物の原則として植物の上に坐るなど、云ふことは蟲か何かでなければ出来はしない、一丈六尺もあるやうな佛様が蓮華の上に坐り様がない、併し見慣たせいか誠に格好がいゝです、椅子に腰をかけて居る佛様も面白くないし、飛行機へ乗った佛様も行けない、蓮華を理想とすると云ふことは永い間の習慣である、それは何であるかと云ふと清浄を意味する、日本の道徳思想及民風も、淨いと云ふ事から根源して居る、日本の神代歴史に依れば、伊弉那岐尊が伊弉那美尊に會に、夜見の國へお出でになつた

△△△清潔人種の祖先△△△
 △△△清潔觀より生れ△△△
 出たり

あきらかなること日に若かんや。きよきこと蓮華に若かんや

夜見の國へ行つて體が汚れたと云ふので、阿波岐原に於て、禊を遊ばして體をお浄めになつた、其體を浄めたと云ふ時に國土經營の諸の神様が出來て、其中心となつたのが天照太神だから、淨いと云ふ事を理想として神様が出來た、其仕來りが段々國民の風俗となつて動ともすると直に體を洗ふ。

日本では非常に不潔を嫌う、尾籠な話をするやうですけれども婦人の月經などを日本の神様は忌むと云ふ、日蓮聖人のお弟子に婦人の信者があつた、其方が月經の時に慎しむと云ふ神様の教があるが、佛法では如何でござ

●●●
隨方毘尼

これ清潔種族の
觀念を佛教より
裏書する證判也

るか、月經の時に法華經を讀誦しては惡るいか宜いかと云ふも尋ねをした、其時に日蓮聖人は何と答へたか、佛教にはさう云ふ沙汰はない、日蓮あらく一代藏經を拜見したが婦人の月經を忌むと云ふことは別に書てない、書てはないが併し「隨方毘尼」と申して、其國々の法律規則に隨つて或部分までは佛法の仕來りに違つても其國の法律を守れ、斯う云ふ事を釋尊が教へられた、經文には婦人の月經を忌むといふことはないけれども、日本の仕來りて之を忌むと云ふことで、神は嫌はせ給ふことの傳へになつて居るから、それ等を斟酌して、佛道の事を

天が下
淨き國あり
大やしま
巴雷

するのにも仰々しき儀式だつた事は止めて、心に能く信仰を練つて、妙法蓮華經とお唱へあつたら宜からうと云ふことを答へられた『月水鈔』と云ふ御書がある、之に依ると、月經を忌むと云ふことは佛法には無いけれども日本の國風がさう云ふ清潔を貴む國風だからそれに隨つて云ふ斷案を下された、斯の如く清潔を貴ぶと云ふ國は何所にも無い、この清いと云ふことを以て道德の基礎とせられたと云ふことは即ち古聖人の道を傳へたもので日本人は無闇に體を洗ふ、洗はぬと心持が悪い、日に二度も三度も湯に這入る人がある、度々這入るには窮屈な

西洋人もこの頃は入浴の利を悟れりとの事、近日の新聞紙に見ゆ、左もありなん。

着物だと面倒だから、直ぐ裸體になれる様な着物を好む西洋人は湯に這入らないで着物へ垢を着けてさうして着物を洗濯する、體の垢を着物に着けて洗濯する、てもなく丁度なすり付けるやうな形、日本人にはそれは出来な、剥出しの體を持つて行つてゴシ／＼洗はなければ氣が済まない、垢摺をかけて輕石で洗ふ、女などは鶯の糞まで用ゐる、黙つて打遣つて置けばトクサもかけかねない、其位に洗ふと云ふことは自然清潔を好むと云ふ民風が今日の風俗を成して居る清潔人種で、世界各國何れの國でも日本人位清潔に重きを置く國はない、是は神様か

潔癖の人はウソをつか筈なり、然るにウソをつくは、是れ病たる所以なり

らの仕來りて、宮中などでは腰から下へ手が觸れることがあると、『次ぎになつた』と稱して必ず其手を洗ふ、是は着物で覆はれて居るから宜ささうなものだが洗はなければ何も出来ぬ、其通り日々やつて居る、さう云ふ潔癖に過ぎるやうな清潔思想があると云ふのは、古よりさう云ふ清潔を以て徳の基とした遺風である。

十八 時代化せる變性

斯の如くごく古い聖人の教と云ふものが此國にちやんと現存して居る、それを傳へて來た古い家柄であるから古い道德思想と云ふものが我國道德の中心になつて居

◎物◎を◎清◎潔◎に◎す◎る◎
◎は◎即◎ち◎事◎物◎を◎整◎
◎へ◎る◎な◎り◎

る、それから汚いものを奇麗にする、是は變化の上から之を横に見て、形のあるものを横に見て整理する上から申せば物を整へることである、物を整へると云ふのは即ち物の中心を定めるので、物の中心を定めること、汚い物を奇麗にすること、上下の分を正すこと、斯う云ふやうな思想は是は正直と云ふことからななければならぬ、體を奇麗にする位正直なことはない、體を奇麗にする通り心を奇麗にする、例へば斯う云ふ話がある、借金が氣になつてならない、それを返して仕舞ふと誠にさばさばとして好い心持だ、丁度垢を背負つて心持が悪るい之

内外俱淨

を洗つたら誠に好い心持だ、斯う云ふのと同じ意味で、體質の上から汚れを去つても、心靈の上からさう云ふ厄介を拂つても同じく好い心持になる、責任を果して好い心持になつたと斯う云ふ、さうして見れば無いことを有ると云ひ有ることを無いと云ふ嘘をつく位、心持の悪いことはない筈だ、それを今言ふ通り殆ど嘘をつくの人は人間の權利であるかの如くに考へ、商人は懸引をする買ふ者は直切つて平氣で居る、打遣つて置けば電車の話ではないけれども乗逃げ勝手次第、東京市民二百萬は悉く薩摩守に任官の宣告を受けて、そこで乗換場所に鉄を入れ

やたらに佛を多く祀るから、人間もやたらになるなり、然りやたらなり、やたらは亂雜の謂也

を彫つても觀音様を彫つても同じ譯だ、運慶が彫つた觀音だから貴いと云ふのなら猿の根付でも同じことだ、觀音では根付にはならないから、寧ろ猿の方が直が高いかも知れない、斯う云ふ風に、僅に彫り手の技倆に依て持續される様な姿で有て、眞の感化が及ばない、古は及んだらうけれども今日は及ばない、往昔及んだ時分の觀音様の感化はどうである、今日及ばなくなつて三錢か五錢か取つて三萬三千三百三十三體の觀音様を見世物にして居る時はどうである、どっちが日本人に利益があるだらう、寧ろ今日の方が無邪氣だ、昔の觀音様は觀音様から

日本人に與へた害が幾らもある、觀音に罪は無いけれども觀音に依て害を爲して居ることが幾らもある、阿彌陀様でもお釋迦様でも同じことだ、阿彌陀や釋迦に罪は無いけれども間違へて教へて居るから人間が悪くなる、法華經でも同じこと、間違へて教へればそれは必ず害になる。

二十 徴兵除けの御祈禱

日蓮主義でもそれを鼓吹する人が間違へれば、その誤られた日蓮主義に依つて害を爲す、或る在所でドンドコ太鼓を叩いてお祖師様を祀つて御祈禱をして居るから、

巴雷

御祈禱も

徴兵除と

なり下り

太鼓鈍々

ブリキ奸々

目 豈計らんや「兵隊よけ」のお題

何をして居るのかと云つて聞くと、脊戸の空兵衛の忤が兵隊に出さうだから、兵隊に出ないやうに拜むのだと云ふ、「徴兵除」の御祈禱をして居る、日蓮聖人は國家と云ふものは國民が寄つて守らんければならぬものだと言いつて立正安國と云つた、正を立つて國を安んずる。其日蓮聖人を拜む所の人がお祭りのやうな騒ぎをして、國を治める爲の南無妙法蓮華經が、豈計らんや「兵隊除」の御祈禱、之には日蓮聖人もお驚きになつたらう、そんな鹽梅にやつて居れば、日蓮宗が手傳つて非國民を作つて居るので、それが若し何かの拍子で兵隊にでも出なかつ

法華亡國

いろくのお祖師様

た日には、「お祖師様の御利益で徴兵を遁れた」と言ふのであらう、宜い面の皮なのはお祖師様だ、とろく徴兵を忌避する所の非國民を造る宗旨「法華亡國」と言はれても已むを得ない、國賊の親方になつて仕舞はねばならぬ、それが東京などへ行くと「厄除のお祖師様」なんと云ふのがある、是は人間が厄年に當ると其厄を除けて下さると斯う云ふ、それから頭痛の時にお祖師様の頭へ焙烙を冠せて灸をすへると云ふのがある、さう云ふお祖師様がある、頭痛のお祖師様に、疝氣のお祖師様、厄除のお祖師様、さては徴兵除のお祖師様、色々なのがある、

『日蓮を敬ふとも悪しく敬はざる國亡ぶべし』の聖訓を思ふべし

十方土、爪上土

無盡の當るお祖師様もある、お祖師様たるものも斯の如く間違へられては實にどうも：：幾らお釋迦様が貴くても法華經が有難くても、其本意を失へば此通り：：。

二十一 誤謬を正すは救の第一なり

『世間の罪に依て惡道へ落る者は爪の上の土の如く佛法の過に依て惡道に落る者は大地微塵の如し』と日蓮聖人はお歎きになつた、親殺しをしたり火つけをしたり、さう云ふやうな罪で惡道に落る者は爪の上の土ぐらゐしか無い、佛法の習ひ損ひに依て惡道に落る者は大地微塵の如く多い、是は大事件、それであるから日蓮聖人は血眼

佛法の誤りよりして國は誤られたりとの斷案が抑そもの發足點なり。

寺あれども教なく。佛あれども感化なき今の佛教。

になつて佛法の誤りを正さんければならないと説かれた、人の心の本になつて行く所の柱に誤りがあれば其國は大變だ、機關車の後へ汽車が附て行くやうなものだ、機關車が新橋の方へ向つて行くのに汽車が神戸の方へ行かうたつてそれは出来ない、教も其通り根本を誤れば其教に依て却て皆害されて仕舞ふ、今日の場合では何宗も彼宗もない、ない證據と云ふものは佛様がお寺にあつても、其佛様の感化がどう及んで居るか云ふことは確證が出来ない、若し確證が出来るといふならば、佛教が渡つて千有餘年、もとく嘘をつかない人間であつただ

毒を使ひ得るは
 醫師のみ、權を
 用ゐ得るは如來
 のみ、未代の凡
 夫は唯その實を
 用ふるの一途あ
 るのみ。

やうな場合に禪宗が出る、是等は皆或時には薬であつた
 相當の効はあつたけれども、それはモルヒネを以て人の
 病を治すやうなもので、どうもあの薬はよいからとて今
 度はモルヒネを御飯の代りに食つたらどうだ、さう云ふ
 譯には行かない、一時の變勢に依て其變勢を救ふ爲に必
 要なのだ、對機說法應病與藥の教は必ず其場合に限つて
 居る、いつ迄も固守すべきものではない。

二十二 常の食餌

いつでも差支ないものは即ち萬世を貫いて人間の土臺
 となり、諸の理性の根源となる所のものである、是は千

●●●●●●●●●●
 死●●●●●●●●●●
 不●●●●●●●●●●
 用●●●●●●●●●●
 心●●●●●●●●●●

載萬世を貫いて動かすことの出来ないものである、其動
 かすことの出来ない大眞理と云ふものをば吾々は求める
 のである、丁度吾々が牛乳に依て營養を取り米の飯に依
 て養ひを受けるとか云ふやうなもので、風を感じた時に
 はアンチピリンの様なものを感じて風を感じた場合に
 だけなのだ、風を感じないのにアンチピリンを服用する必要
 はない、脚氣の薬は足がどうかなた時に服用、頭痛の
 薬は頭がどうかなた時に服用、頭も足もどうもならぬ
 のにそんな薬は要らない、けれどもどうなつてもならぬ
 ても、食はずには居られない、死なない用心に何物かを

瑞穂の國

食^たべなければならぬ、唯^{たゞ}食^くひさへすれば何^{なん}でも宜^いいと云^いッて土^{つち}の團^{だん}子^ごを食^くふ譯^{わけ}には行^いかない、一^い番^{ばん}養^{やう}ひに良^らい物^{もの}をば食^くふ、凡^{おほ}そ食^{しょく}物^{ぶつ}中^{ちゆう}一^{いっ}番^{ばん}優^{ゆう}等^{とう}な物^{もの}を選^{えら}んで吾^{われ}々^々は常^{じやう}食^{しょく}とする、日^に本^{ほん}人^{じん}は米^{こめ}とま^まッて居^ゐる、西^{せい}洋^{やう}人^{じん}は牛^{ぎう}肉^{にく}などを常^{じやう}食^{しょく}として居^ゐる、そ^こで肉^{にく}食^{しょく}が宜^いか穀^{こく}食^{しょく}が宜^いいかと云^いふことは、專^{せん}門^{もん}家^かの間^{あひだ}でも屢^{しばしば}々^々議^ぎ論^{ろん}があるやうであります、吾^{われ}々^々共^{ども}は專^{せん}門^{もん}家^かでな^いからどッちがどうだか分^{わか}らないが、日^に本^{ほん}人^{じん}は昔^{むかし}から米^{こめ}を食^くッて居^ゐる、米^{こめ}の良^よく出^で來^きる國^{くに}で「葦^{あし}原^{はら}の瑞^{みづ}穂^ほの國^{くに}」と云^いッて、米^{こめ}が性^{しやう}に合^あッて居^ゐる、又^{また}釋^{しやく}迦^か如^{にょ}來^{らい}は米^{こめ}を煮^にて食^たべると云^いふことに就^つ

て屢々^{しばしば}功^{こう}徳^{とく}を説^といて居^ゐる。

二十三 教へ損ひと習ひ損ひ

要^{えう}するに牛^{ぎう}肉^{にく}なり牛^{ぎう}乳^{にゅう}なり米^{こめ}なりと云^いふやうな柔^{やはら}かくて養^{やしな}ひになると云^いふ温^{おん}和^わな所^{いはゆる}謂^わ中^{ちゆう}性^{せい}の食^{しょく}物^{ぶつ}を選^{えら}ばんければならぬ、偏^{へん}性^{せい}の物^{もの}をふだん食^くふ事^{こと}は出^で來^きない、唯^{たゞ}一^{いっ}時^じのぼ^ぼせたとか熱^{ねつ}が出^でたとか云^いふのを治^{なほ}す爲^{ため}には、偏^{かた}ッた物^{もの}を用^{もち}ゐる、それは國^{こく}家^かに變^{へん}亂^{らん}が起^{おこ}ッた時^{とき}に戰^{せん}争^{そう}をすると同じだ、戰^{せん}争^{そう}をして天^{てん}下^かを取^とッたからと云^いッて、年^{ねん}中^{ちゆう}戰^{せん}争^{そう}を以^{もつ}て世^よを治^{をさ}めると云^いふことは出^で來^きない、昔^{むかし}支^し那^{しな}の賢^{けん}人^{じん}が、漢^{かん}の高^{かう}祖^そにその學^{がく}問^{もん}を用^{もち}ゐないことを諫^{いさ}める言^{こと}

中性の食物

巴雷

きけばとて
毒^{どく}は毒^{どく}なり
モルヒネを
飯^{めし}のかはりに
たべられもせず

佛敎を以て美術の恩人とするは、體のよき侮

葉の中に、『陛下は馬上に於て天下を取ったから學問は要らぬと仰しやるが、然らば馬上に於て天下を治め得るか』と言った、それで一言もなく學問を獎勵したことがある、變に處する場合には劔戟を持たなければならぬ、弓鐵砲も持たなければならぬが、それを常に擔ぎ出されては大變である、藥も其通りだ、毒藥でも何でも或場合には入用だけれども、ふだん用ゆべきものではない、此日本が儒敎でも或は佛敎でも今日まで此日本の國民性を養つて來たと云ふが其れは違つて居る、單に佛敎のお蔭で五重の塔が出来たとか、美術がどうとか云ふことを以

辱なり、それを得々とせる佛敎者は、おめでたき至りなり。

巴雷

方便の使ひ過しに
閻魔も舌を
抜き忘れけり

て奇特の中に數へて居ることは誠に耻づべきことだ、それは佛敎のお蔭もある、けれども佛敎と云ふものは橋をかけた道を開いたり井戸を掘つたり温泉を掘つたりするものが商賣ぢやない、それは附録だ、號外だ、佛敎は即ち人心を開發して人の性情の中にある一つの力を認めるのが本職だ、所が佛敎が這入らない前、儒敎の這入らない前の日本人は、誠に公明正大嘘をつかない人間であつたのが、佛敎が這入り儒敎が這入つてから、大變嘘つきになつた、是は佛敎のせいだらうか、何のせいだらう、嘘を教へたんでないとしても、苟くも宗教たる以上は少

くも嘘をつかぬやうに教訓が出来さうなものではないか。

斯の如く論じ來つたならば、此世界中で一番宗教の數の多いと云ふ日本が、其多くの宗教からは何等の良き感化を受けなくて、依然として嘘をつくものが多い、電車へ乗つても「懷中物御用心」と云ふ、それは其中に物を取る者が居るから用心しろと斯う云ふのです、けれども電車などへヒヨツと誰か乗つて來る、車掌は無意識に「懷中物御用心」と斯う言ふ、其所へ恰も乗つて來たものは、俺が乗つたら「懷中物御用心」と言つた、乃公を泥

●●●●●
懷中物御用心

御用心
乗合中の
目つきかな
巴雷

棒と言つたに違ひない、數へて見れば三十人か五十人の中です、其中で誰か物を取る奴が居ると言ふ宣告を受けたりやうなもの、「ちよつと車掌さん、懷中物御用心と言つたが、誰を用心するんだい」と云つて聞く人も無い、爾う言はれるとみんなキョロ／＼して懷ろを押へる所が豈計らんや懷ろを押へる先生も矢張り用心される方の人に數へられて居ながら之を怪しく思はない、蕎麥屋へ行つても懷中物御用心、電車へ乗つても懷中物御用心、芝居へ行つても懷中物御用心、寄席へ行つても懷中物御用心、而も時計や煙草入の繪がかいて有つてそこへ「御用心」

と文字が加えてある、日本と云ふ國は何所へ行つても泥棒が多い國だ、一人々々を分けて考へて見ると誰が嘘をつき誰が泥棒をすると云ふ人種もない、勿論嘘をつくの商賣にして物を取つて歩く少數者はある、是も其者が生れたてから取るんぢやない、惡習慣の爲にさう云ふ風になつた、何かの教へが惡るいたためである。

二十四 感化無能

お寺の屋根が漏るからと云ふので檀家へ一軒残らず帳面を廻すが、其檀家の中に親の頭を打つて懲役になつたと云ふものがあつても、和尚さん一向構はない、馬鹿な

屋根替と親の頭

世の中が悪い

奴だと云つて知らぬ顔をして居る、自分の檀家で自分の寺の家根替の時に寄進を取りに行くなれば、是等の人に對し、佛法とまでは行かずとも、先づ人間の道だけなりとも教へて置かなければならぬ、それを教へないのは、お寺が惡るいよりも、坊さんが惡るいよりも、世の中が惡るくして仕舞つた、世の中が不得要領になつて、何の爲に佛像やち經があつて、何の爲に坊さんが居るか、坊さん自からも知らない、死んだ時分に拜んで貰ふ爲めだと云ふならば、何もそんなに大きな家を拵へて本山の布教の何宗大學のと云つて居るが、そんな大學も何も要ら

死人教に何の學問を要すべきぞ

警察とお寺

ぬ、死人に向つてお經を讀んで『今や汝に悟道の要句を授けん』ぐらゐなら、塔婆を書くこととお經を讀むことを知つて居れば宜い、お經などは蓄音器へても吹込んで置た方が便利だ、それが中學だの大學だのと云つて三年も五年もブツクせゝりをして、其揚句が死人に向つて、『今や汝に！』でもあるまい、畢竟生きた人間を教化する爲に大金を使つて學問をするんだらう、所が檀家に親の頭を擲る奴があつても、我不關焉とすまして居る、親の頭を擲つたつてそんな事はお寺へ來ないで警察へ行きなさいなどと云ふ、警察へ行く前がお寺だ、頭を擲つて仕

誤れる佛教は、世の中を誤り了し、世の中は佛教を誤り了し、互に素となり因となりて、みんごと國を毀はし了せるなり

舞つては警察の手を經るやうになるが、其頭を擲るやうになるかならないかは學校の先生かお寺の方の管轄だらう、分擔的にならば半々で宜いから、學校の教師とお寺の坊さんとして聯合で以て教化して居らねばならぬけれど、そんな事はちつともしない、本堂の屋根が漏れば相違なく金を集めに行くが、檀家が親不孝しても打遣つて置く、打遣つて置ても構はぬやうにして仕舞つた、是は今更坊さんが不精で行かない譯でもない、行くやうに教へて置けば坊さんだつて行く、行かんでも宜いことに世の中がして仕舞つた、檀家の人も今度の和尚さんは能く

腰が低い

お寺を掃除してお經を讀む、朝早くからお經を讀むと見えて鐘の音が聞えると言ふが、豈計らんや寢て居てカ！ンとやるの中にはある、『どうも今度の和尚さんは如才ない、檀家が行ツても如何にも腰が低い』とこんなことを言ふ、とんでもない間違だ、人を教化する菩提寺の和尚が腰が低いから宜いとは何事だ。

二十五 死生顛倒

葬式佛教と婚禮佛教

葬ひの時には和尚さんを聘ぶけれども、婚禮の時には和尚さんを聘ばない、佛法と云ふものは死んだ時にはかり要るものではない、死人に引導を渡すことなどは實は

何の爲め？

どうでも宜い、死んだ時には神主へ頼んだツて宜い、婚禮をする時の引導こそ大切だ、お前方は是から愈々世に立つのだが、どう云ふ量見を以て世に立ちなされる、女房を持つ何の爲に女房を持ちなされる、何？子を拵へる爲に持つ、何の爲に子を拵へなされる、其安心が立たなければ結婚しても何にもならぬ、人も家も結婚に依て一代の力を生ずるのである、釋迦如來の佛法は是が爲に世に立つて居るので、此結婚の晩こそ菩提寺の和尚さんの檜舞臺だ、『どうか吾々も今日の目出たい結婚に依て、佛法の心を以て世を渡り、佛法の心を以て身を修め、さうして

檜ノ木舞臺

巴雷

一生の
首途に法の
帆をあげて
屏風が浦に
高砂の舟

結婚の第一條件

稼業を勵んで立派な國民となりませう』と斯う云ふ風に誓ひを立て、さうして力ある光明ある人間なり家庭なりを作ると云ふのが佛法の職務だ、諸君は婚禮に坊さんを聘びます乎、聘ないてせう、聘れない坊さんも坊さんだ、聘ばない檀家も檀家だ、それぢや私はお寺の坊さんは聘ばないが學校の先生を聘んで心得方を聞くと云ふなら未だしも、婚禮と云へば媒妁人が這入ッて嫁と婿で盃の遣取をして、高砂やと謠ッて、それからあとは金屏風と杯盤狼藉で終ひ、是れ結婚の第一條件を忘れて居るのである、汽車に乗るに切符を忘れたやうなものだ、さう

未來が何だ!?

證文の出し後れ

して子を拵へるから碌でもない子が多く出来る、かくて死んだらお寺へ駈付けて行ッて、有ッても無クても宜い引導などを有難がッて居る、未來が大事だなんて！未來が何だ？ 此世の中でさへ碌素法役に立たぬ奴が、未來に地獄へ落ちやうと、豚にならうと勝手にするがい。

二十六 活ける好實例

死人に向ッてお經をジャブ〜讀んで、譯も分らぬ引導だとか何とか云ふ理窟を言ッて聞かせる、死んで仕舞った者に理窟が要るものか、證文の出し遅れよりもツとひどい、さうしてもう死掛ッた時分に、お前も大分年を

●●●●●信心

死に近づかねば佛教の用なしといふ考は争ひもない「死人教」より來れる觀想なり今の佛教を覺醒せしむるの捷徑は、寺院の葬式を廢めるに在り

老ツたからそろ／＼信心でも始めたら宜からうと斯う云ふことを言ふ、お前も年を取ツたから信心を止して碁でも打ツたら宜からうといふなら聞えて居る、人は若い中こそ信心が大切である、論より證據、生證文だ、この本化行學會と云ふ會で演說會を開いた、大分若い會員が居る、どう云ふ人達だか知らないけれども多くは青年だ、當り前から言へば何か酒でも飲むとか遊びあるくと云ふやうな時代の人間、それが先へ立ツて演說を開いて、何だかみんなして入費を出して演說會を開き、本をみんなにやツたり、ピラなどを書いて若い紳士達が方々貼ツて歩

△△△△△光明の宿れる青
△△△△△年これ眞の佛子
△△△△△なり良民なり

●●●●●行學二道

いて、頭の禿げたお爺さんは引張られて此所に聞きに來た、斯うならなくては行かぬ、是が本當の理想の佛教である、若い者の方は先に立ツて世の中に活動する中心なんだから、之に佛教の光明が宿ツてなかつたら、人も世も枯れて仕舞ふ、人間勝手の心でやツたら仕方がない、妄念妄想の心を定規としてやツたら何所まで狂ツて行くか分らぬ、そこで強大なる教と云ふものがあツて人間を導く、其強い教に導かれて行ツて、否應なしに正しいものになるやうに道を求め道を磨く、それが行學、行學の二字は日蓮聖人の『行學絶えなば佛法はあるべからず』

巴雷
 智惠の目に
 修行の足で
 怠らず
 行けばほどなき
 みほけのくに

の金言を取ツたのである、行は修行、學は學問、佛法を學んでそれを行ふ、今あなた方が一時間でも二時間でも聽て居る、是は學ぶ、吾々が話して居るのは教へて居るやうなものだけれども實は上佛祖に對しては學んで居るのである、稽古して居る、試験を受けて居るやうなものだ、扱之を學んだだけでは行かない、私が此演壇に立つて、大に日蓮主義の講演をする、演壇から降りて非日蓮的の行爲をしたなら何にもならない、喋舌ツただけのことは體にも行はなければならぬ、口で國體を擁護すると言ツたら、身でも國體を擁護しなければならぬ。

二十七 佛性の善感

諸君もさうだ、此演説を二時間でも三時間でも、寄席へ行く代りだからと云ツて、聽て居る人もあるかも知れぬ、それはあつても構はぬ、來る迄は何でも構はぬ、何だか東京から講演をする人が來る、どんなことを言ふか一つ聽て見やう、どんな面をして居るか見てやらうても來る迄は何でも構はぬ、無禮講だ、其代り此所へ來て一時間でも二時間でも聽たら生涯、それが五臟六腑に染渡ツて、必ず業をする、それはあなた方の心の奥底に或物がある、あなた方自から知らないで居ても或物がある、

來るもの拒まず、
 入るものは漏さず、
 此大慈の命ずる化
 道の巨網なり。

或るもの

佛性

無明

是は佛法では釋迦如來でも阿彌陀如來でも大日如來でも
 あらゆる佛様と同じ性質のものを一つづつ持つて居る、
 それを段々に育て、行けば佛にも聖人にもなる、即ちそ
 れは「佛性」と云ふものだ、其佛性に私の講演が諸君の
 耳を経て五臟六腑を透して貫徹する、幾ら拒んでも仕方
 がない、電氣が感ずる、それから「佛性」の隣にもう一
 つ此佛性と相並んで其反對のものがある、之を「無明」
 と云ふ、無明は「明かなることなし」だから暗いといふ
 事だ、之を「迷」ひ又は「煩惱」と云ふ、煩惱の根元の「無
 明」と云ふものが其奥底にある、それにも衝る、どつち

正しき感受

に強く當るか、佛性に早く感受する者は佛性が段々育ち、
 成程あの講師の言ふ所は尤もだ『あの通りだ』さうなけ
 ればならぬ』と斯う考へる、さう考へられた以上は必ず
 それが家へ歸つたらば、段々其心になつて、自然と自分
 もさう云ふ心を持ち、人にもさう云ふ心を持たせたいと
 云ふ考を、諸君が否でも應でも起さんければならぬ、是
 が「行」と云ふものになる。

二十八 出直し

それから不運にして佛性の方に無線電信が感じないで
 無明の方ばかり感ずる人がある、是は講演を聴いても『あ

衝動によりて病を治することあり
 實行のなき學問、今日今日の通病なり、口耳の學問、虚名の學問、月給の學問、終に是れ世を毒する學問。

んな事を言やアがツて面白くもない』と思ふ、藥瞑眩せずんば其病癒へずとあるから、それでも宜しい、早晚其人は其病が脱ける時が来る、どツちにか中らずには居ない、喋舌ツて居る間は、聽て居る間は「學問」、それを心に入れて考へて行ふ時は「行」となる、「行學の二道を勵ませ給へ行學絶えなば佛法はあるべからず」、行と云ふのは實行です、そこで此行學の二道を勵むと云ふ爲に、若い人達が卒先してやつて居る、即ち佛教の感化が及んだ證據だ、「年を老ツたからそろ／＼信心をしたら宜からう今の若さに信心などは氣が利かないぢやないか」、斯う云

死んでの後の供養や追善は勿論(未來の孝といふ意義に於て)大切の事なり、然れども其れのみにて生存中を構はぬといふは顛倒の甚しきものなり。

佛菩薩に聞かせ
 る經文、死人に
 聞かせる經文、
 情けない經文、

ふやうなことを言ツて、悪るい方に誘惑しやうと云ふやうな者が幾らもある、若い者には佛法が要るのだ、年寄はどうでも可い、死んで仕舞ツてからは尙どうでも構はぬ、唯人間だから禮を以て葬らんければならぬ、犬猫のやうにする譯には行かない、人間を葬るの禮を以てするだけのことで宜いのだ、神主のやうな人が出て来て埋めても構はない、郡役所から出て来て役人が立會ツて埋めても構はぬ、警察官の立會でも可い、恭しくお辭儀をすれば宜しい、死人に向ツて爾時世尊なんて幾らお經を讀んだツて聞えやアせぬ、魂が聞くと云ふが其は別問題だ

戒名の事後承諾

世は「須く諸宗
無得道墮地獄の
根原」の聖判に

生きて居る中に早く聽かした方が宜い、死んで仕舞ッてからの名を「戒名」と云ふが、「戒名」と云ふのは「戒を受けた名」と云ふことで、教を受けて其人の弟子になつた印しにやる其名が戒名、死名ではない、死んで了つたものに「戒名」と云ふことはない、斯う違ッて居る、斯の如く違ッて來れば其感化なるものは少しも價値が無い、是は遣り直しです、總て出直さなくては行けませぬ、日蓮聖人の金言の通り、日本現在の弘まッて居る佛法は、今日まで日本の國民を十分に感化し得なかつたのみならず、國民性を害して居る、斯の如き雜亂混淆の世の中に

驚起すべきなり

先進の國

したと云ふことは何であるかと云ふと、紛れもなく國體の自覺を失つたからである。

二十九 世界文明の消化

國體の自覺とは何ぞや、日本國は道を以て世界を統一して世の中を率ゆると云ふ先進の道の國である、此國の民は道の把持者たる天職を持つて居ながら、道を忘れてさうして却て救はれる方の相手の人間より劣るやうになつて、先生の方が生徒より劣ッて居ると云ふやうな馬鹿馬鹿しいことであつたならば、實に冠履顛倒の甚しいものと言はねばならぬ、西洋人は文明國だと云ッて日本へ

世界のあらゆる文明を消化するは、やがて世界を思想上より統一するの基本的な

色々のことを教へた、機械工藝等の有形の文明は確に西洋が先進である、西洋の文明を輸入して来て、日本は大国に國力を發展した、それは争へぬ、然れども「日本の國體」は西洋から教はつたのではない、電氣だとか鐵道だとか軍艦だとか鐵砲だとか云ふやうなものは是は西洋から来た、西洋ばかりぢやない、昔時は支那からも色々な文明が来た、朝鮮からも昔は文明が来た、日本と云ふ國は自國に於て何等文明を作り出さずに皆外國の文明を吸収して日本の文明とした、日本の文明と云ふのはさう云ふ文明ではない、日本の文明と云ふのはあらゆる世界の

り、日本の國體は即ち此消化液なり。

こなれて血になる

文明を吸収してそれを整へる文明だ、それが人生の「力」である、日本の國體は丁度胃の腑のやうなものである、色々な物を食べてさうしてこなして之を血にする、こなす所の消化液と云ふものが胃の腑の中にある、それがあから人蔘でも牛蒡でも豚でも牛でも食へるとこなれて血になる、日本の文明は文明の消化液である、消化液其ものは養ひにはならない、他の物を消化して始めて營養を得る、人蔘牛蒡は畑から取つて来る、魚類は海から捕つて来る、鰯でも鯨でも何でも構はない、或は野獸を捕つて来る、あらゆる食物を取つて来てこなして皆血にし

世界萬國の文明
 消化して日本
 文明の血となり
 肉となる、然る
 上は是れ他國の
 文明にあらざし
 て正しく日本の
 文明なり、この
 日本文明こそ
 やがて世界最後
 の文明なり。

て仕舞ふ、血にして仕舞へば人蔘でもなければ牛蒡でもない牛でもない吾身の血なり肉なりである、西洋の文明や支那の文明は人蔘牛蒡のやうなものだから、「國體」の消化液にかけて消化して、是が日本の材料の血となり骨肉となる、之を 明治天皇は『世々厥の美を濟す』と仰せられた「厥の美」と云ふのはそれだ、であるから日本と云ふ國は自分の國にさう云ふ機械的の文明は有して居らぬが、消化液と云ふ文明の原液があるから何でも十分にこなし得る、斯くてその能判能融の大能力を發揮して、終に世界の文明を調整統一するのである。

世界文明の潮湊

諸越

三十 日本は根なり

佛教でも儒教でも日本で拵へたのではない、他の飯を食ッて拵へたものだ、又織物だとか繪を畫くことゝか彫物とか云ふものも朝鮮から來た、三韓の文明をそツくり持ッて來た、支那の文明も大分來た、笛を吹たり太鼓を叩いたり碁を打つことから茶をたてること、一切支那から持ッて來た、昔は支那のことを「もろこし」と云ツた、是は彼の國から、もろくを越し來るから「もろこし」、それでは向ふが「から」になるだらうと云ふので「から」と云ふのかも知れん、餘りからになつたからあとがシ

据膳は 巴雷
焔て喰はず
神の國

ンとして仕舞ツたので「清國」といふわけかもしらん、
何でも外國の文明を持って来て日本の文明にすると云ふ
のは、旦那様が座敷に坐ッて居て、下男が焔から牛蒡や
人蔘を採ッて來、海から魚を捕り池から鯉を捕り、野か
ら牛を捕ッて來て牛の乳から牛乳を搾ッて來る、それを
砂糖と味淋で味をつけてお饂どんがサア召上がれと座敷
へ持ッて來る、その据膳に對ッて箸を執ッて喰ふような
ものなんだから、決して西洋の文明だの支那だの印度の
文明だとの云ッて隔つべきものでない、佛教が日本へ來
た時『是は印度の教だから日本に入れては行かぬ』と云

世界とは大なる日本
なり、されば世界の
いづれに生じたる文
明も、皆これ日本の
文明なり。

ッて頑古黨が之を拒んだ、後 聖徳太子が之を融和して
印度の教、支那の教と云ふことはない、皆日本のものだ
と云て、 聖徳太子の方が私より先に、千三百年も前に
さう云ツた、世界各国の文明は皆日本の文明ぢや、日本
と云ふ國に根があッて其枝葉が支那だの西洋だのに行き
其花と實が天竺へ行て居ると 聖徳太子は仰せられて、
『儒教は枝葉なり佛法は果實なり日本國體は根なり』と
斷定なされた、日本の道が根、花と實が天竺の佛法だ、
枝葉が支那の儒教だと云ふ、其時分には西洋のことはな
い、西洋は未ださう勃興しない、勃興すれば矢張り同じ

西洋も印度も
支那も日本の
離れ座敷と
悟れ世の人

こと枝葉の中へ這入るのである、斯う云ふ風に世界と云ふものを一個に見て仕舞った、世界を一つに見れば其世界の頭の頭とか尻とか云ふだけの違ひなんだから、どの國もこの國もない、今西洋の文明が日本に這入って來たからと云つて、他國のものが日本へ來たと云ふのではな、日本の此消化液に依て消化されべき運命を以て西洋の文明が日本に來たのである。

三十一 中心の集綜力

日本から見れば西洋も日本の國なんだから、お座敷はこつちにあつて離座敷が向ふにある、物置があつちにあ

一視同仁の心は、四海を以て一家と爲すこと當り前なり、四海兄弟を口の先や空想に及ぶてなく、實地にそが建造に取、五百年になる國が、この日本なり。四海兄弟は、一家は世界統一の情理なり。

つて臺所がこつちにある、一軒の家だつて清い所の部分もあるれば汚い部分もある、表へ出た分もあるれば隠れた分もあるだらう、それをどれも一緒には出來ない、床の間は奇麗だからと云つて家中皆床の間にして置く譯にも行かない、世界も一つの家で其家の中でそれく役割がきまつて居る、哲學宗教のやかましい印度のやうな所には佛法が出來、禮儀典禮のやかましい國柄の支那には儒教のやうなものが出來、生存競争の甚しい國柄の西洋には機械工藝が進歩する、此世界と云ふ大きなもの、文明が究極に至つて何物にかこなされる運命を持つて居る、

堂々たる宣言

總ての文明をば消化して一つの中心の中に集める、其力
 を持ったのが即ち日本の國體である、さう言ふと唯日本
 ばかりえらくするやうに當るかも知れぬが、それは仕方
 がない、何所の國にも斯う云ふ自覺を以て肇つた國は無
 い、昔から我が家は人間の爲に正道を護る所の役目あり
 と云ふ御自覺を以て此國を建てられ天皇の位にお即きに
 なつて、尙ほ將來も此道を擴張せねばならないといふの
 で、神武天皇は其建國垂統の大宣言として、『上は天
 神國を授け給ふの徳に答へ、下は皇孫正を養ふの心を弘
 め、然る後に八紘を掩ふて家となし六合を兼ねて都を開

大理想によりて

かん』と仰せられて天皇の位に即かれた、實に堂々たる
 大宣言だ、世界を以て一つと爲さんければならぬと云ふ
 思召だ、而し弱い國をいぢめてこつちのものにしやうと
 云ふ意味ではない、切取強盗と云ふ意味ではない、今世
 の中で戦争して強い國が他の弱い國を取ると云ふ筆法で
 やつて居るから、それと同じに考へられては引合はぬ、
 さうではない「道」です、正義を擴めやう、正道を護ら
 う、此道に従はないものがあれば撃う、此道に集まつて
 來ない國は綱を以て引掛けても之を寄せやう、斯うして
 世界を一つにしやうと云ふ大理想を以て建てられた、さ

は寶物のせり賣
げに然かあるべ
き運命なり。

巴雷

理髮店
道具の市を
兼業し

漫性阿彌陀病

千倍萬倍の力を奮ひさうなものではないか、尤も阿彌陀
様に向ッて引取ッて下さいなんと云ッても、若し阿彌陀
様が『さうか、よし直に引取ッてやる』と云ッたら、『そ
れてはどうぞ少々お待ちなさッて下さい』と云ッて逃出
すかも知れない、是は信仰と云ふよりも一種の習慣です
何だか阿彌陀様！と聞くと何となく有難い、そこへ坊さ
んが出て来て少し念佛の効能などを話すと、體がしほむ
やうになッて、何だかムヅムヅと痒くなるやうに有難くな
ッて来る、一口に信仰と云ふけれども、こんなのは病氣
の部類である、一種の精神病です、漫性阿彌陀病とも云

ふべきものである。

三十三 難きを選んとするは亡國心なり

漫性鈍奴誇病

阿彌陀様ばかりではない何でもさうだ、さう云ふのは
法華の方にだッてある、理窟もへちまもなく、太鼓をど
ん／＼叩いてブリキの空罐などを鳴らし、お祖師様に恥
をか、せるのも知らないで鈍怒誇やッて居るものもある、
そんなのは漫性ドンドコ病だ、病的信仰はいかない、健
全な信仰でなくてはならぬ、さうかと思ふと、唯ベソ／＼
泣いて救ひだの慈善だのと言ッて居るものもある、こんな『無
理性』な『劣感情』な不精なづるい觀念が、國民の信仰と

いづがかる根性、
是れやがてウツ
をつき、ものを
も盗ひ品性の元
なり、恐るべし
慎むべし。

なつて居ては大變だ、打遣つて置いてさい不精をしやうと
して居る、『仕事は大勢でする食物は小勢で食ふ』と斯う
云ふ主義、さう云ふことをば冗談半分にも、吾々は子供
の時分に聞かされて、成程是は道理だと考へて居たもの
だ、後になつて是はとんでもない思想だと云ふことも分
たけれども、其時分には尤もだと思つて居た、何も學校
で教はつたのではないけれども、誰となくそんなことを
言つて聞かせるから成程さうだと思ふ、そんなことを眞
にうけて、成たけ用はしないやうにしやう、樂をするや
うにしやうと云ふ所から、むづかしい事はするな、法華

あゝこの伶俐!
終に天下を亡す
を知らずや。

經などは難行と云つて修行がむづかしいからそんな事は
止せ、念佛の方は唯南無阿彌陀佛と唱へさへすれば引取
つて呉れる、お任せして置けば宜い、南無阿彌陀佛と唱
へぬても唯唱へやうと思ひさへすれば宜い、是は非常に
埒が早い、一切南無阿彌陀佛で義理も理窟も要らない、
此位やさしいことはない、極惡深重の凡夫は大慈大悲の
阿彌陀様を頼むより外はない、むづかしい事はしない方
が伶俐だ、法華經は尊いだらうけれども吾々の機根に能
はないと言つて斥ける、さうして世話のない南無阿彌陀
佛が宜い、何でもむづかしい事は行かないからやさしい

方に就かうと云ふ、是は誠に宜くないことであらうと思ふ。

三十四 百徳は勤勉より起る

むづかしい事を我慢してやれと教へなければならぬ、實際は何もさうむづかしいことはない、考へて見れば藁苞苴の中へ金を入れて本願寺へ持つて行く方が餘程むづかしい、論より證據一生懸命になれば何でも出来る、ふだんは力の無い者が、火事でもあると重い二十貫目もするやうな箆筒を脊負つて出て行く、火事が止んでそれを持つて歸らうとする時には中々擡上がらない、さう云ふ譯

樂て難きに就け

一生懸命

孔子は不怠不倦の語を以て一生を盡す明治天皇も精勵を以て一生を貫きたまふ

だから一生懸命になれば持つてると云ふ原則だけは確かだ持つて歸る時にも一生懸命で、五割引でも宜いから我慢してやツたら宜い、成たけ樂をしやう樂をしやうと云ふのは成たけ不精をしやう不精をしやうと云ふこと、それは行けない、人は怠ると云ふことが一番わるい、嘘をつくことでも人を殺すことでも一切其根源はなまけるから起る、それから一切の道德の源は勉めると云ふことかから始まる、勉強です、勉めて居れば金も出来る、怠れば碌でもない者になる、溪川で何とか云ふ槍みたやうなもので魚を突く商賣がある、流れて来る魚をつーツと突く、

初めは中々突けないが商賣だから仕方がなしにやッて居ると、終ひにはどんだん突けるやうになり、終に何とか云ふ槍の名人になつた、槍を稽古しやうと思つたのではないが、寶藏院の先生にも劣らぬ者になつた、一生懸命になれば其位の功は現れる。

三十五 百惡は懈怠より起る

怠める、と云ふ位貴いことはない、怠けると云ふ位悪いことはない、怠けると云ふのは不精をしやうと云ふので、不精をしては人間と云ふ者は何も出来なくなる、本當に不精になると、自殺するより外仕方がない、自殺す

怠るの極は自殺

なり

宛然亡國の民

るにしても華嚴の瀧へ行くのは面倒臭い、鐵道往生も痛い、川へ飛込むも冷たい、首を縊るのも面倒だ、愈々食はずに死ぬより外はない、是が一番樂だ、或不精な奴が辨當を脊中へ脊負ッて居て途中で腹がへツた下ろして食べやうと思ふけれども下ろすのが面倒だ、腹は段々へツて来る、どうか好い工風はないかと思ッて居ると、向ふから人がやッて來た、あの人に下ろして貰ッて食べやうと思ッて待ッて居ると、向ふから來た人は口を開いて居た、ア、口を開いてるから多分あれも腹がへツて居るのだらう、あれに談判して一つや二つやッても宜いから下

矛盾大矛盾

明治天皇精勵の洪徳
千古に絶す身心の
勞苦甚しけれども
避暑寒をも爲した
まはす、然れども之
を以て少しも他を責
めたまふこともなし
是れ相待的精勵にあ
らずして法的精勵の
進威を絶たざるなり

矛盾です、懶ける代りに慾も無いと云ふのなら宜いが、
仕事はしまい、けれども慾はある、そこで嘘をつかなか
れば追付かなくなつて嘘を付く、働くのは面倒だから手
取早く胡麻化して取らうと云ふことになる、勇猛精進で
何でも働かなければ行ぬ、明治天皇は「勉める」と云
ふことを一切道德の標準となされた、御自分は十善萬乘
の御位に在らせられたにも拘らず日曜さへも御休みにな
らず、寒さ暑さにも寒暑をお避けにならず、汲汲として
民の爲に善政をお執りになつた、之でも足りないあれで
も足りないとして、孜孜としてそれが爲に精神を疲勞ま

世人は深く明治
天皇を研究し奉
れ

しくつた結果が御病原となつて、非常なる偉大なる御性
格、御體質も立派な御體質であつたにも拘らず、日露戰
争以來身心過勞の結果として、此間の御病氣をお起しに
なつた、實に是は吾々國民の爲に御身體をば削つてお終
ひになつたやうなもので甚だ以て畏れ多い事である、
明治天皇が吾々にお下しになつた賜は、最前も申しまし
た通り第一が人道の正義、第二が政道の正義、其上に人
道政治の根源たる所謂道本理原たる國體の體達を示現せ
られた、凡そ國家を論ずる者、日本國を論ずる者、就中
明治天皇をば研究せんとする者は、先づ第一に是を考

書てない、所が憲法政治と云ふものは西洋の眞似をした
 んだと考へて居る者もあるが、是は大變な違ひで、憲法
 政治の發達は西洋の方が一足先きに發達したか知らない
 けれども、憲法政治の大主眼、其實質は日本に疾くの昔
 から既にあつた。

三十八 世界最古の憲法國

日本は古より政を行ふに憲法政治を本としてやつて
 居る、それは神武天皇の建國を始め御代々の天皇の詔
 勅に於ても明かでありませす、又ずつと遡つて神代の昔で
 も大勢の神様をば方々の國々から集めてお謀りになる、

十七憲法これ堂々たる
 文明の大治なり

所謂神集ひに集ひ神謀りに謀らせ給ふ、即ち帝國議會は
 西洋の眞似をして俄かにやつたのではない、日本には日
 本の法がある、聖徳太子は既に治國の大本「十七憲法」
 をばお作りになつた、此十七憲法は今日の憲法とは自か
 ら内容も違ひませす、違ひませすけれども兎に角憲法と云ふ
 ものを作つて、其憲法の下に政治を執ると云ふ標準を與
 へたのは、確に日本が外國に卒先して居る、其時の都合
 に依てやるのでない、聖徳太子が既に先鞭を著させら
 れて居る、であるから 明治天皇は 皇祖皇宗の遺訓と
 仰せられた、憲法發布の詔勅に「皇祖皇宗の御遺業をば

道も徳もすべ
 祖宗の遺訓遺業
 ぞと詔らせたま
 ふはこの國の體
 性之を然らしむ
 るものにして、
 明治天皇の御私
 にあらず。

擴張する爲に茲に憲法を發布するぞ」と仰せられた、
 西洋に則つたとは仰せられぬ、今日の文明國の風潮を照
 合はして差支のないやうにして、先祖の道をば世の進運
 に乗じて世の中に發布するぞと斯う仰せられて只新たに
 分明に人民に參政の權をお分ちになつたまでである、憲
 法でも其通り、况や父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し朋
 友相信ずるの人倫問題に至つては猶更の事 皇祖皇宗の
 遺訓だと仰せられた、此 皇祖皇宗の遺訓だと言ふ根源
 は「勅教」の初めにも仰せられた通り、「國を肇むること
 宏遠、徳を樹つること深厚」とある、國を肇めるとは何だ、

「眞理」の武装
 せるものは「正
 義」なり

國を肇めると云ふのは國家の組織をなさると云ふことば
 かりてはない、國の魂たる正義正道を養ふ事だ、 神武
 天皇の御事業は「養正」と云ふ二字で彰はしてある、正
 を養ふ！養ふは保護するので正義を保護する、「正義」と
 云ふのは眞理を人間の行ふやうに仕立てたものが正義、
 「道」と云ふのはこつちから向ふへ行くのが道だ、人間
 の行ふ道、佛になるのも神になるのも道と云ふものを外
 れては行かない、東海道より京都へ行く、奥州街道より
 奥州へ行く、其道を行けば目的地へ行かれる、東海道を
 通つて奥州へ行くと云ふ譯には行かない、因果必然ちや

んとさままつて居る、それを「道」と云ふ、人間になるには人間の道を行はなくてはならぬ。

三十九 天地の公道

そこで今吾々は人間である、人間である以上は人間の道を行はなければならぬ、人間の道と云ふものは何所から出て来たか、人間の道は人間だけで拵へるか、人間以上のもので何か聯絡があるか、ありとすれば何所から聯絡が付いて居るかと云ふと、人間の道は人間だけで拵へた道では行けない、人間より以上の者の作られた道と一つになつて居らねば行けない、人間だけで拵へた道は人

道は中心を仰いで歸依に集るべ

きなり、然らずれば道にあらず

間だけの通用で他へは決して通らない、例へば「牛は人間の食物だ」と斯う云うのですね、吾々も牛は食ふけれども、人間の食物だと思つては食はない、牛は人間の食物に出来たと云つて食つては牛に對して相濟まないのです、西洋ではさう言つて居る、耶穌教ではさう云ふ理窟を許して居る、神が人間の食物に拵へたんだと云ふ、是は人間には都合が好いけれども、牛には都合が悪うい、牛がそれを聞たら怒るだらう、「怪しからぬ奴、吾々は力の競争の戦には負けて居る、仕方がないから食はれるのだ、それを食物だ權利だとして食はれては堪らない」と

る、一々引換へに行く者はありはしないが、行かないで、も引換へられるとしてあるから日本國中通用する、ちやんとそれだけの保證が付いて居る、若し保證もなく正貨の準備もなく、政府が財政上に信用を失して仕舞へば、紙幣と云ふものは通用しなくなる、其信用の根元は實貨實力の充實にある、銀行も其通り、いつ行っても銀行で支拂ツて呉れると云ふから、證文一つ入れないで通帳一つで取引する、銀行と云ふものは信用が大切である、それであるから、どうかすると詰らぬ内情の破綻などを針小棒大に吹聴されると、取付けに逢ツて銀行が迷惑す

眞理は正貨の如く
正道は紙幣の如し

る、私も曾て一銀行を救つたことがあつたが、非常に困るらしい、尤も中には全く圖々しいことをやる奴も稀にはあるから仕方がない、要するに正貨の力とか信用とかは普遍性の功用を有したものである、眞理大道も亦その通りで、人間でも神佛でもどこへでも通用しなればならぬ故に、人間の仲間だけで通用して萬物に通用しない理窟ならば、それは公道とは云へない。

四十一 神人の交通

所謂公道は何物に向ツても差支のない道でなければならぬ、それが正道だ、牛が聞いても豚が聞いても鮪が

●●●●●
聖者の裏書

神とか聖とかいふは
すべて眞理正道の代
表者なりと知るべし

聞いても鱒が聞いても、どちらからも御尤もと云ふ道でなければならぬ、それには何所から出た道が一番宜いか畜生や地獄から出て来たものは行けない、神とか佛とか云ふ方から筋を引張って来たもの、さう云ふ貴いもの即ち聖者が裏書をしたものでなければ通用しない、そこで「神人の一如」と云ふ必要がある、神様と人間と交通する必要が起って来る、神の心を人間の心に移す、神の心と云ふものは何だ、佛法で言ふ菩薩の心とか佛の心とか云ふ、正しい道を行ふ心である、先天的に正しいばかりでなく、後天的にも正しい道を行ふ、耶蘇教の神様は修

●●●●●
人も神と成り得る道
すなはち是れ天地の
公道なり。

行も何もしないで元から尊い有難い神様であるといふ事だが、何所から出て来た神様か分らない、どうしてあるのだから分らないとさめてある、人間が神様のことを彼此れ言ふことは出来ぬとしてある、佛法では人間でも神様になれば畜生でも神様になれる、どう云ふものでも其道を行つたものは行つただけの果報を得られる、人間をすつかり仕上げて完全な人間にすれば行止まる、其行止りからもう一つ上へ行けば、人間より上へ出る、丁度小學を卒業して中學に行き、中學を卒業して高等學校に行き、高等學校を卒業すれば大學、大學を卒業して學士

●●●●●
大なる神格

になり大學院に這入り、それを卒業すれば博士になる、それから先きは世の中の學校と云ふもので幾らても立派なものになれる、斯う云ふもので段々と上から上へと向つて行つて修行をして行けば、終には一番の頂上に達する、それが佛教で申すと、佛といふので即ち大なる神格である、であるから阿彌陀様であらうとお釋迦様であらうと、無因自然の佛様はない、因て來る所がある、阿彌陀様でも寶藏比丘と云ふたゞの人であつたが修行して佛様になつた、お釋迦様でも凡夫であつた、それが修業して佛になつた、どんな尊い佛様でもみな「道」を行つた

「我れ本と菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命今猶未だ盡きず」とは佛の金言なり、位高ければ高きほど道を行ふことますます大なり。

ものだ、其神様佛様を手本にするのだから、其手本に電氣が通じて居る道でなければ本當の道でない、上から下の方まで何所へ行つても、雙方が故障を言はないで、平等に承服する道でなければ天地の公道ぢやない、天地の公道でなければ、吾々の行ふべきものでない。

四十二 人間は虱の食物にあらず

單に牛は人間の食物に出來たと云ふやうなことは、人間の仲間では通用するけれども牛の方には通用しない、牛は之に對して必ず抗議を申込ひてあらう、強いから弱いものが食物になると云ふならば、虎と人間と對して置

贅澤なる食物

くと一匹取換なら人間は虎に食はれて仕舞ふ、加藤清正と云ふやうな人は別として、吾々のやうな者が虎に對すれば虎に食はれて仕舞ふ、さうすると人間と云ふものは「虎の食物」に天が作つたと言つたらどうだ、虎なんと云ふものは強い爪もあれば體も大きい、大分もとてが掛かつて居るが、もつと簡單なもので人間を食物にして居るものがある、それは何だと云ふと蚤や虱だ、虱なんと云ふやつは大威張で人間を食物にして居る、世の中に此位贅澤な食物を食つて居るやつはあるまい、さればとて人間は天が「虱の食物」に作つたとは言へまい、太田南

畝と云ふ人が「愛虱の記」と云ふものを書た其中に「凡そ世に憎むべきものは蚤と蚊と蠅と蜂なり、虱は其形至つて靜かにして少しく仁者の風あり、形を襦袢の裏に隠し交りを縫目の間に結び人を食つて悠悠然として怖れざるものは豪傑の風あり」とかあつた、太田南畝は虱に親類でもあつたか知らないが大變褒めて居る、此筆法で人間は虱の食物なりとされて仕舞つては堪らない、だから、小さいものでも人間を食ふやつもあるです。

四十三 順當なる生存競争

けれども往古から人間が肉食をセンければならぬと云

天賦の必要上肉食を取る故に之を喰ふや必ず其節制の下に於てせざるべからず

ふ必要上、諸の動物をとつて食つて居た遺傳があつて、それで今日まで肉食をせんければならぬと云ふので魚や獸のやうなものを食べる、それは人の齒が野菜を食ふ齒と肉をこなして食ふ齒との二つある、白のやうな形の齒は野菜をこなす齒で、それから牙のやうな刃物のやうな齒が、肉類を食ふやうに出來て居る、此構造から考へれば穀食も肉食も天賦の必要上食べる、強いものは弱いものを征服して食べるので、必ず何を食べるときまつたものでもない、有る物を食べる、けれども鯨などは「數の子」と云つてどつさり子を持つ、一匹からあれだけ澤山

自然の相生あれは、こゝに天然の相尅ありて天地萬物生息の宜きを制す

の何萬と云ふ子を持ち、あれが正直に孵つて其二代目の鯨が又澤山の子を持つ、さう云ふ風にして五六代も經たうものなら、世界中鯨だらけになつて仕舞ふ、他の水族が來て啖ふから新陳代謝して居るのかも知れぬ、梅や桃でもさうだ、一本の樹から梅がどの位生るか分らぬ、大變なもの、私の所にも梅があるけれども梅時分にはどつさり實を採る、一本の樹に五斗も六斗も一石も生る、あれが一つ一つ樹になる、其樹から又五斗も六斗もの實がなつて、正直に是が鼠算で行つたら、終ひには世界中皆梅になつて仕舞ふ、皆々各々蕃殖の道は立ツて居るけれ